



TRANSFORMING FUTURES

障害のある人びとに包摂的で
ジェンダー・トランスフォーマティブな変化の物語

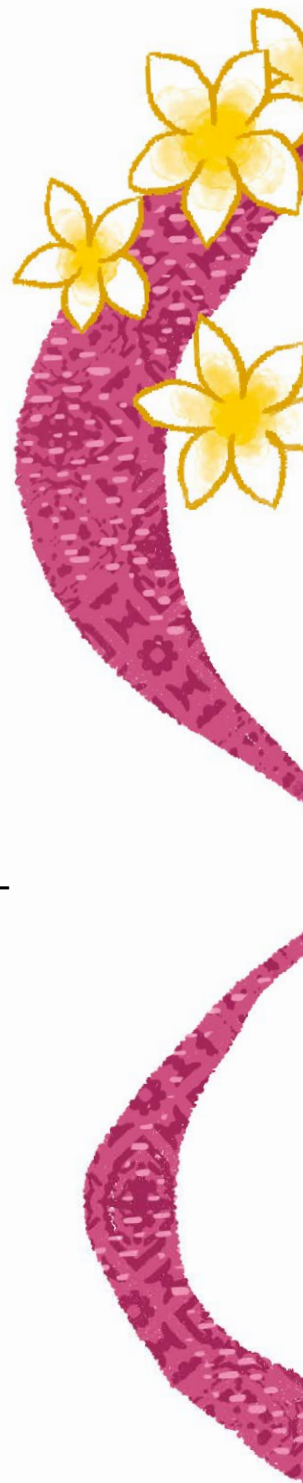



クレジット

執筆・共同開発: Henry Salas、ジェンダー・包摂担当上級顧問、プラン・インターナショナル・フィンランドとLana Woolf、社会的包摂担当上級コンサルタント、Community Powered Responses (www.communitypoweredresponses.com)

イラスト・デザイン: Sonaksha (www.sonaksha.com)

本報告書はフィンランド外務省(MFA)の支援を受けて作成された。本報告書に記載された見解は著者たち個人のものであり、必ずしもMFAの見解を反映したものではない。





本報告書を実現させたすべての人たちにむけて

私たちは、My Body My Future 2(MBMF2)プログラムを支援くださった、プラン・インターナショナル・フィンランド/各国別事務所/パートナー組織に所属する素晴らしい仲間、障害のある人びとと主導の障害がある人のための組織(OPD)の献身的なパートナー、本報告書の基盤に声を織り込んでくれたプロジェクト参加者全員に、心より感謝する。

あなたたちの強さ・レジリエンス・正義への揺るぎない献身が、これらの物語に命を吹き込み、私たちはその中の言葉を通じて、その力を増幅し、リーダーシップを賞賛し、既に起こしている変革的な活動を称えたい。

これらの物語は、誰も取り残されない世界への結束と希望の灯として輝いている。フェミニズムと集団的行動の精神のもと、最も排除されてきた人びとと協働するとき、変化は可能であるだけでなく必然となるという信念を持ち、私たちは共に立ち上がり、結束している。

背景

変化は物語から始まる。レジリエンスの物語。反抗の物語。挑戦された制度と打破された障壁の物語。沈黙を拒み、道を切り開くために前進した障害ある女の子とユースの声の物語。

それらの物語は人びとを鼓舞させるだけではなく、現状維持を妨げ、人びとに注意を向けさせ、運動を起こすものである。また、個人に留まらず、コミュニティ全体や今後生まれる世代に至る、変革を推進する力となる。

ここから始まるページには、プロジェクト概要や技術報告は記載されておらず、実際の抵抗とリーダーシップに関する6つの物語が記されている。各物語が、障害のある人びとに包摂的でジェンダー・トランスフォーマティブな変化の構築が最も緊急に求められる状況で、それが意味するものを、鮮烈かつ赤裸々に描いている。

それらの物語は、ラオス・ミャンマー・エチオピア・モザンビーク・ウガンダ・ジンバブエの教室・診療所・村・都市といった現実の生活に基づいている。それらは、プラン・インターナショナル・フィンランドのMBMF2プログラムでの、参加型のフェミニストな振り返りの過程で現れたものである。同プログラムは、性と生殖に関する健康と権利(SRHR)の領域における、障害のある人びとに包摂的でジェンダー・トランスフォーマティブな変化を

推進するものである。それらの物語は、排除の重みと自身の居場所を主張する力の両方を理解する者たちによって語られた。

それらの物語の核心は、根本的な問いに答えている。最も排除された人びとが主導する、包摂的で権利に基づく変革とはどのようなものか。

モザンビークの村・ウガンダの校庭・ジンバブエの家庭訪問・ラオスの職業訓練センターといった、さまざまな現場で、MBMF2はその問いに理論ではなく実践で答えようと試みた。本報告書の内容は国境を越えて再現可能な画一的モデルではなく、現地主導の文脈に根差した障害を持つ人の包摂への取り組みを示したものであり、各物語が社会的・政治的・文化的環境に深く基づき形成されている。

それらは力に関する物語である: 語る力・決める力・抵抗する力・変革する力。それらの物語は、歴史的に脇に追いやられてきた人びとが主導権を握り、障害のある思春期の若者とユースが単に包摂されるだけでなく、中心に据えられる場合、何が実現できるかを示している。それらは障壁を打破し、新たな未来への道を切り開く物語であり、語られることのない変革を起こしている数々の物語である。



いかに物語は展開されたのか

それらの物語の創出は、プログラムが包摂を最重要事項とする姿勢を体現している。その過程は、プラン・インターナショナルの各国チームと現地パートナーのOPDがオンラインで集まる、複数国が参加した学習ワークショップから始まった。同ワークショップは、自身の活動を批判的に振り返り、障害のある人びとに包摂的でジェンダー・トランスフォーマティブなSRHRにおいて、「優れた実践」が意味するものの探求を目的としていた。

それは、チェックリストによる確認作業のようなものでは決してなく、学びの共有と率直な対話の場の提供となり、以下のような挑戦的な問いが投げられた。

- * 何がうまくいっているか
- * どこに格差があるのか
- * 私たちが学び、他の人びとが知る必要があるものは何か

ワークショップ後、私たちは各国特有の状況を深く理解するため、プラン・インターナショナルの職員とOPDパートナーに対し、詳細なインタビューを実施した。彼らが経験した障壁・採用した戦略・最も共感できる物語。それらのインタビューから、リーダーシップ・信頼・適応・社会規範の変革と利用可能性の向上に必要な、不可視化されていることが多い労力に関して、豊富な知見が得られた。それらのインタビューから、各物語の描写を構築・拡充した。これらの物語は成功事例として紹介されることを意図したものではなく、進行中の変革を率直に記録したものであり、成果だけでなく、変化を可能にしたプロセスや葛藤、関係性にも焦点を当てた。

個々の物語をつなぐものは

個々の物語は独自のものであるが、それらは障害のある人びとの包摂が追加的要素ではなく、大きな変革的変化を生み出すものとして受容された場合に何が可能になるかを示す、力強い物語を紡ぎ出している。それらの物語は、最も排除された人びとを中心に据え、彼らを疎外し続ける制度に挑戦することが、持続的な影響を生み出すことを証明している。

では、それらを何が結びつけているのか？

- * **最も頻繁に排除される人びとを中心に据えることに対する、確固たる姿勢。** 物語の中で、障害のある思春期の若者とユースは、後付けの存在ではなかった。ミャンマーのピアエデュケーター・ウガンダのピア指導者・モザンビークのSRHR等などの形で、彼らは活動の設計・実施・リーダーシップで中心的な役割を担った。
- * **信頼できる親しみあるスペースの利用。** 類似制度を構築する代わりに、プロジェクトはユースが安全と感じるスペースにSRHRを統合した：ジンバブエでは家庭・エチオピアではコーヒー/お茶会・ラオスでは職業訓練センター・ウガンダでは学校。



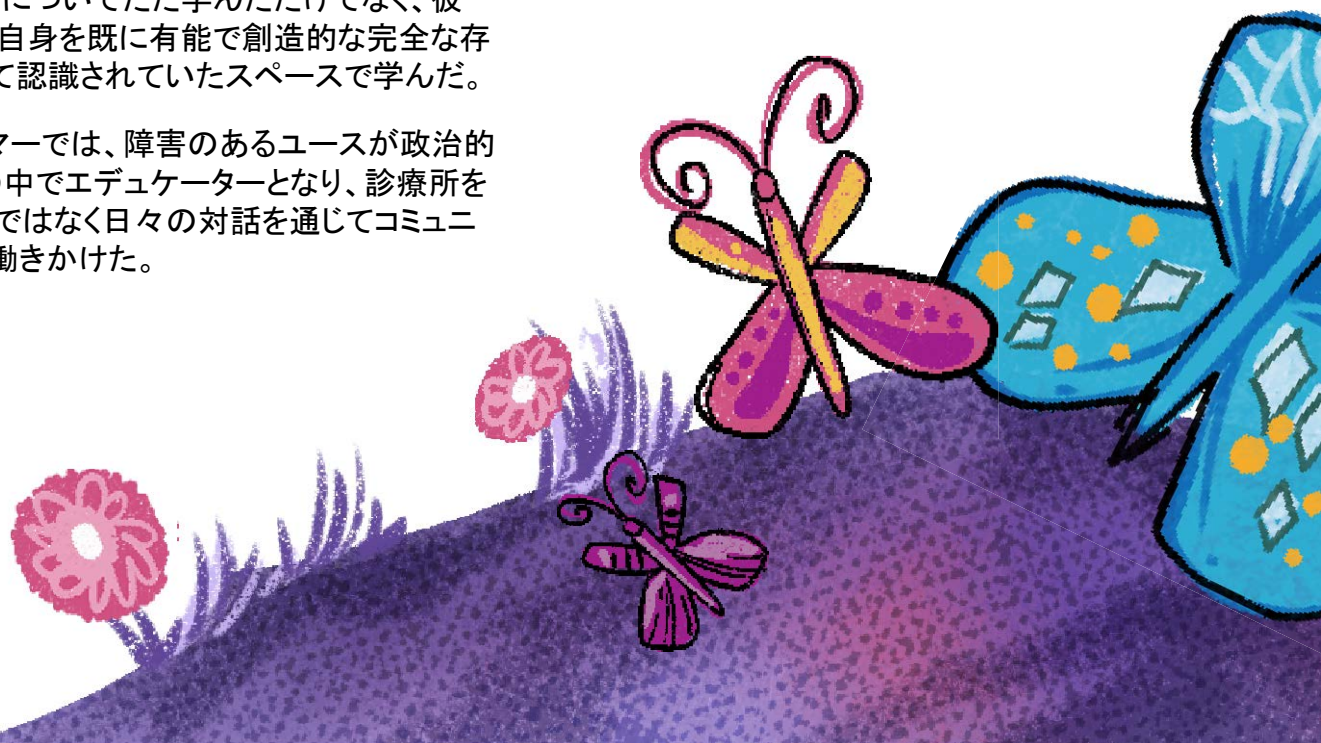
- * **体系的思考**。それらは単発的な介入策ではなかった。多層的で関係性のある持続可能な変革を生み出すために、各物語は医療制度・教育・家族・コミュニティリーダーシップといった、複数の面に関連していた。
- * **エチオピア**では、正式なシステムが時に機能不全に陥る中で非公式のコーヒーやお茶の集まりが、SRHRへのアクセスを創出し、文化に根ざした仲間主導の対話を可能にしている。
- * **文脈の理解と適応**。それらの物語は、脆弱な政治状況・言語的多様性・スティグマ・インフラ面の制限の中でも、障害のある人の包摂がどう発展し得るかを示している。それらは、障害のある人の包摂とは画一的なものではなく、尊厳と敬意に根差した柔軟な取り組みであることを証明した。
- * **モザンビーク**では、世代間対話と障害のある人に包摂的なユースクラブが、SRHRの提供方法と理解の仕方に関する制度全体の変革を起こした。
- * **規模よりも存在感の優先**。それらの物語は、広範な影響力や大規模な改革に関するものではなく、深さに重点を置いている: 信頼の構築・変化への継続的な関与・関係性や社会規範の変化を起こすまで続けたという事実。
- * **ウガンダ**では、障害を持つユースがアクセスを再定義し、学校や診療所に訴えるだけでなく、内部から検証した。
- * **ジンバブエ**では、ファシリテーターが家々を回り、包摂を家庭に導入し、あらゆる公式の制度から忘れ去られることが多い障害のあるユースに支援を提供した。

それらの物語は完璧なモデルを示すものではなく、障害のある人びとに包摂的でジェンダー・トランスフォーマティブなSRHRが、いかに勇氣・創造力・集団的リーダーシップを必要とするかを示す実例を提示するものである。それらは、障害のある人の包摂が単なる追加的なプログラム要素ではなく、私たちの活動が真に変革的であるかを測るものであることを示している。

なぜ個々の物語には影響力があり、変革的なのか？

それらの物語の真の影響力は、数値や政策上の成果は存在することは確かだが、それだけで測れるものではない。その真価は、障害のある人の包摂が真に優先された場合、SRHRをどう再定義し得るか、という点にある。

- * **ラオス**では、障害のある女の子たちは月経や同意についてただ学んだだけでなく、彼女たち自身を既に有能で創造的な完全な存在として認識されていたスペースで学んだ。
- * **ミャンマー**では、障害のあるユースが政治的混乱の中でエデュケーターとなり、診療所を通してではなく日々の対話を通じてコミュニティに働きかけた。



省察と行動の喚起

それらの物語は、単なるMBMF2の一環として実施されたことの記録ではない。それは私たち一人ひとりが立ち上がり、変化に関与するよう促す、力強い行動喚起である。

私たちに促していることは以下のとおりである。

- * 障害のある人に包摂的な活動への関与が意味するものを真に省察すること
- * 特定の声が聴いてもらえないままである理由を問うこと
- * すべての人びとがサービスの利用者であるだけでなく、その形成に真に関与できる制度をどう構築できるかを探求すること
- * それらの物語は変革が可能なだけでなく、既に起きていることを私たちに再び認識させてくれる: あまりにも長い間、ここに属していないと言われてきた者たちにより、しばしば先導される、静かで、粘り強く、力強い変革。
- * これらの物語が、ただ聞くだけでは終わらない行動へと私たちを駆り立てるものとなるように。大胆に、創造的に、そして共に動くよう、私たちを促すように。障害のある人の包摂は、チェックリストを埋めるためのものでも、技術的な修正でもない。それは、勇敢な政治的・倫理的な誓約である。正義・平等・私たち皆が享受できるべき人間性のための闘いと主張するあらゆる活動の基盤そのものである

エチオピア
12ページ



TRANSFORMING
CONVERSATIONS



TRANSFORMING
POSSIBILITIES

ラオス
18ページ

モザンビーク
24ページ




TRANSFORMING
LIVES



TRANSFORMING NORMS



ミャンマー
30ページ



ウガンダ
36ページ



TRANSFORMING POWER



TRANSFORMING HOMES



ジンバブエ
42ページ

略語集

CSE	包括的性教育
CRPD	障害者権利条約
ECDD	エチオピア障害者開発センター
FAMOD	モザンビーク障害者組織協議
FGAE	エチオピア家族指導協会
LIDUPED	LIDUPED Foundation Uganda
MBMF2	My Body My Future 2
NCDPZ	ジンバブエ全国障害者評議会
OPD	障害を持つ人びと主導の障害を持つ人のための組織
PADet	エチオピア開発専門家連合
SRC	性の権利センター
SRHR	性と生殖に関する健康と権利
TLMM	The Leprosy Mission Myanmar
WWDA	障害を持つ女性協会

用語集

<p>CSE</p>	<p>人間の発達・ジェンダー・恋愛関係・性の健康に関する幅広いテーマを、文化的背景を考慮し年齢に適した形で扱う、カリキュラムに組み込まれた教育</p>
<p>障害のある人びとの包摂</p>	<p>障害のある人が、あらゆるプログラム・サービス提供の面で、包摂され・意見を聴いてもらえ・平等な機会が提供されることを保証する姿勢</p>
<p>ジェンダー・トランスフォーマティブ</p>	<p>ジェンダー・トランスフォーマティブであるとは、行動や介入策が、有害なジェンダー規範・力の不均衡・社会構造に積極的に挑戦・変革させるものであり、あらゆるジェンダーの平等・包摂・エンパワーメントを促進し、持続的な社会変革をもたらすものであるということ</p>
<p>OPD</p>	<p>自身の権利のための提唱活動を行い、社会への完全な参加を促進する、障害のある人が主導・運営・管理する組織</p>
<p>SRHR</p>	<p>身体の自律性・同意権・スティグマや障壁を経験することなく医療サービスを利用できる権利などの権利の擁護も含まれる、個人が差別・強制・暴力を受けずに、自身の性の健康と生殖に関して情報に基づいた意思決定を行えることを保証する包括的な権利とサービスの体系であり、ジェンダー平等・公衆衛生・持続可能な開発の達成のために必須だと認識されている</p>
<p>ユースに配慮した性と生殖に関する健康(SRH)サービス</p>	<p>安全で支援的な環境下で、ユースが自身のSRHに関して情報に基づいた決定を下せるよう力づけることを目的とした、避妊・STI(性感染症)予防・性の健康教育・他の生殖の健康問題に関する情報・カウンセリング・サービス等、あらゆるユースの特定のニーズに応える、秘匿性が保証され、偏見を受けずに敬意あるケアを提供する、ユースにとって利用可能で、受け入れることができる、適切な医療サービス</p>

ETHIOPIA

TRANSFORMING CONVERSATIONS



要約

プラン・インターナショナル・エチオピアのMBMF2プロジェクト(現地ではYene-Raey 2として知られる)は、障害のある人びとに包摂的なSRHR教育を提供する革新的モデルを開拓した。ECDD・PADet・FGAEと連携し、温かく親しみやすい集いの機会となり、エンパワーメントのきっかけとなっている、隔週のコーヒーやお茶の集まりでの談話グループを設けた。

この物語は、コミュニティセンターや木陰の庭にひっそりと佇む空間についてだ。そこでは障害を持つユースが、稀有なものを見つけた。声を上げ、話を聴いてもらえる機会。これまで口になかった疑問を問う機会。そして最後に、自らの身体や未来についての会話の中に、自分自身の姿を映し出す機会を。これは硬い椅子と堅苦しい授業の場のような無機質なワークショップではなく、活気に満ちた有機的な対話の場で、お茶のように自由に物語が流れ、笑い声が難しい議論を和らげ、スティグマの重みがゆっくりと一口ごとに軽くなっていくものだった。アムハラ州とオロミア州で実施された同モデルは、ユースが会話を主導しつつ、障害のある人の包摂と思春期の若者のSRHRに関する訓練を受けた医療従事者が傾聴・配慮ある対応を保証した、ピアリーダーシップと専門家のファシリテーションを融合させたものであった。取り上げられたテーマは月経衛生管理・家族計画・身体の自律性といった、極めて重要な個人的な問題であった。だが同モデルは、単なる情報提供ではなく、参加者が認識するようにし、彼ら一人ひとりが認知され、価値を認められたと感じられるようにすることを目的としていた。家族の支援を得た、言語障害のある参加者とのコミュニケーションであったり、誰も階段を上るといふ困難を経験せずにセッションに参加できるようにする配慮であったり、同モデルは各ユースの現実に合わせて調整を行い、障壁を1つずつ取り除いていった。

その影響は、議論の場を遥かに超えた人びとの生活にまで広がった。ユースは背筋を伸ばして立ち、声は力強くなり、それまでためらっていた部分に自信が確立された。多くのユースが必要不可欠なSRHRサービスを利用するようになり、OPDは影響力を高めたアドボケイトとなり、今まで障害のあるユースの権利を認めるのを躊躇していたコミュニティも耳を傾け始めた。既存の医療・教育構造に障害のある人の包摂を組み込むことで、Yene-Raey 2は単なるSRHRプログラムの提供を超え、真の包摂自体を再定義した; 障害のあるユースが単に包摂されるのではなく、自身の物語の中心に据えられれば、変革は可能であるだけでなく、必然となるからだ。

聴いてもらえなかった声が、今は主導している: エチオピアの障害のあるユースのSRHRの再獲得

エチオピアの多様な地理的環境で、障害のあるユースは今も重層的な排除を経験し続けている。教育や雇用での疎外だけでなく、自身の身体・選択・権利に関する重要な議論からも日常的に排除されている。Yene-Raey 2は、障害のあるユースを自身のSRHRの過程の中心に据えることで、その現実を変えようと図った。

アムハラ州とオロミア州で活動する本モデルは、エチオピアで最も疎外されたユースに支援を届けるため、現地組織と連携した。その核心となる考えは、簡潔で革新的であった: 障害のあるユースが、SRHRについて、決めつけられることを心配せずに、安全に率直に議論できるスペースと支援を享受できるべきだという考えである。

若々しい国の静かな格差: 障害のある人を包摂したSRHRを待っていない理由

エチオピアの人口は若年層が主であり、国民の60%超が25歳未満である。同国では、約800万人の障害のある人が生活している。CRPDの批准等、国家政策は進展しているが、実施状況には依然として重大な欠如がみられる。スティグマ・利用不可能なサービス・障害の医学モデルが、今も状況を維持し続けている。

調査から、障害のある子どもの最大43%が一度も就学したことがなく、障害のあるユースの約80%が保護者と一度もSRHRについて話したことがないことが判明した。大部分のユースはテレビやラジオからの情報に頼っており、コミュニケーションや移動に困難を抱える人びとは一層に不利な立場に置かれている。そうした状況下で、Yene-Raey 2は明確なビジョンを掲げて誕生した。それは、障害のあるユースが自身のSRHRについて探求し、問いかけ、主体的に取り組めるような、仲間同士で支え合い、権利を基盤としたプラットフォームを構築することだ。

お茶やコーヒーを飲みながらの会話

隔週木曜日、真昼の太陽が中庭やベランダに長い影を落とす頃、アムハラ州とオロミア州の3地区に位置する町・村では、淹れたてのコーヒーとスパイスティーの香りが漂っていた。アカシアの木陰・コミュニティの集会場の静かな隅・隣人の家の編み込みマットの上といった、日常のスペースで、12~15名の障害のある思春期の若者とユースの小グループが集まっていた。

その場所の雰囲気は、温かく、気取らず、伝統に沿っていた。



カップがそっと触れ合い、低く静かな挨拶が空気を満たし、それはごく普通の社交の機会のようにも一瞬思われた。しかし、それらの輪で展開されたことは、全く通常のものとは異なっていた。お茶やコーヒーが注がれるように、長い沈黙の後に考えや疑問も発せられた。障害のあるロールモデルたちが主導し、医療従事者たちと共に、「傾聴」を最優先とした。その戦略のもとで、こうした集まりは、率直な本音が語れる安らぎの場となった。議論は、これまで誰も説明してくれなかった月経衛生管理といった実践的なものから、恐怖・望み・自身の身体に対する意思決定権といった深く個人的な領域まで及んだ。多くの人は、自身の身体と将来に対し何を望むか、と初めて誰かに問われる経験をした。

あるユース女性は、声が最初は震えながらも、彼女の望まない妊娠の経験を語った。彼女のパートナーは彼女を見捨てたが、羞恥心からこれまで沈黙を貫いていた。だがここでは、真に理解してくれた仲間たちの中で、彼女は導きを見つけた。現地のOPDに属する仲間の参加者は、聞くだけでなく行動を起こし、彼女に付き添って保健センターを訪れ、アドボケートとして傍らに立ち、彼女が安全な中絶を受けられるようにした。当初は相手にしようとする姿勢を見せなかった医療従事者は挑まれ、そのユース女性も他の皆と同様に権利を持つことを再認識させられた。

別の参加者で車椅子を使用するユース男性のDawitは、入口には階段が存在しているだけで、誰も彼のためのスペースを設けようと考えなかったという単純な理由で、保健センターから追い返された屈辱を語った。彼の言葉は人びとの心に訴えるものであった。数日中にファシリテーターは施設管理者と面会し、2週間以内に解決策が出され、主要なSRHRサービスが1階の部屋に移された。Dawitが初めてその扉を車椅子で通った時、彼は単にサービスを利用しただけではなく、尊厳を奪還した。彼は、患者としてではなく、1人の人間として初めて耳を傾けてもらえたと感じられた、と振り返った。そうしたお茶やコーヒーを飲む集いは単なる会話以上のものだった：変化を生み出し、力づけが語られるだけでなく実践される場であった。ここでは、ユースは知識の受動的な受け手

ではなく、自らの未来を築く担い手だった。互いを高め合い、目の前の障壁に立ち向かい、各議論が可能性を再形成していった。

成功の要素とは

同モデルの成功は、インフラや資金提供だけではなく、信頼・関連性・包摂性を基盤とする人間中心の手法によって実現した。信頼は自然に育まれた。ECDDメンバーがセッションを進行し、自身の差別・レジリエンス・セルフアドボカシーの経験を共有した。それが帰属意識を生み、障害を持つ人を包摂したSRHRが理論上のものではなく、深く個人的で実践可能なものであるという認識を強化した。

医療従事者は単なる指導者ではなく、何よりもまず傾聴者であった。彼らの多くは、意見を述べる前に複数の議論に同席した。彼らの存在は、非公式な仲間同士の対話と公式な医療サービスとの隔たりを埋める助けとなった。時が経つにつれ、医療制度への信頼度は向上した。

各参加者への対応も重要な要素であった。多くの聴覚障害のあるユースは、正式な手話を使用していなかったため、ファシリテーターは視覚的補助・ピア支援による通訳・柔軟な進行形式を取り入れた。ある事例では、父親が娘の独自の家庭内で使われる手話の通訳を手伝ったが、それは施設では認められなかったが、そこでは受け入れられた。

そして最後に、環境が重要な役割を果たした。コーヒーやお茶会は文化的に重要な意味を持ち、気取らないものであり、エチオピアの社会生活に深く根付いたものである。SRHRに関する議論をそうした親しみやすいスペースで行うことで、同モデルは参加への心理的障壁を取り除いた。

思春期の若者たちは診療所や教室に入るのではなく、単に会話に加わっていたのだ。

変化が根付く場所: 成長の瞬間

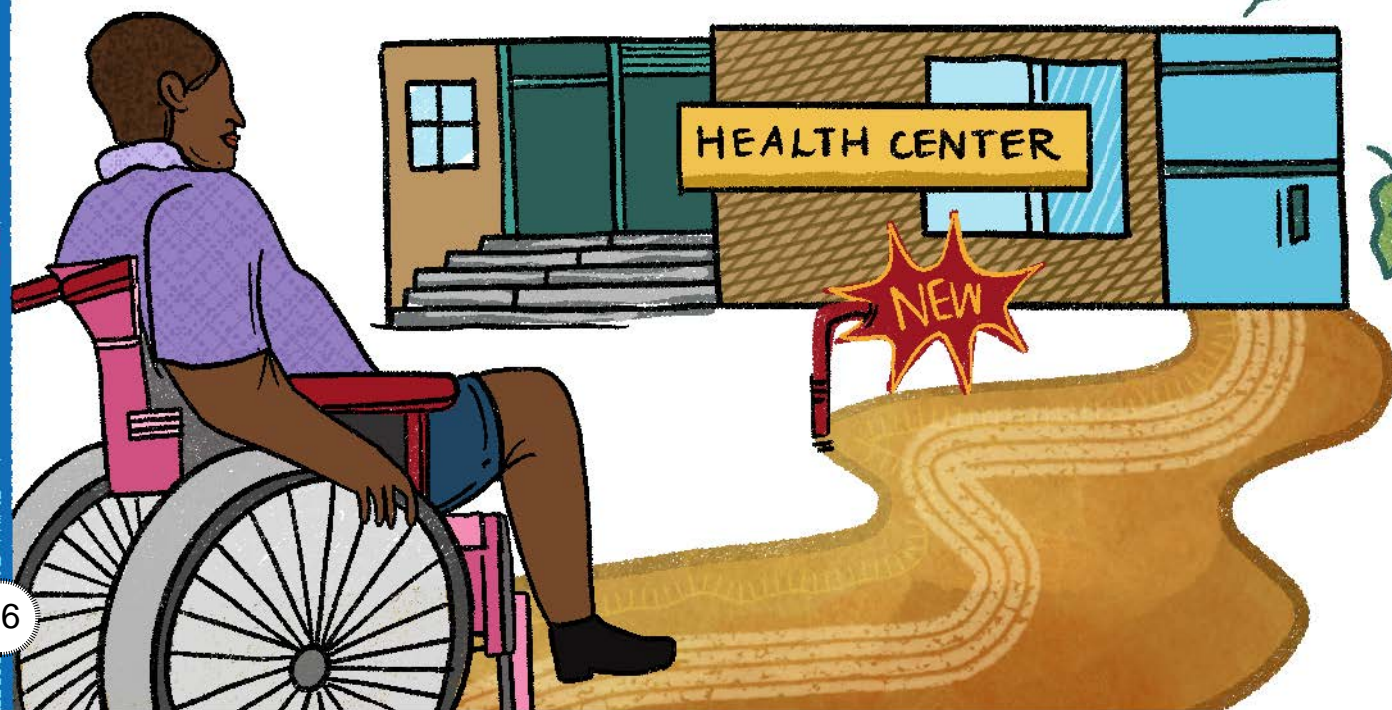
数字やデータを超えて、このプロジェクトの真の影響は、参加者の生活の中で静かに、しかし大きな変化によって計測された。

知的障害を持つ17歳のMeronは、プロジェクトへの参加当初、躊躇し内向的で、いつも姉のそばに寄り添い、その存在に安心を求めている。最初はほとんど発言せず、視線は床に向けられていたことが多かった。しかし数週間が経ち、何かが変化した。グループの温かく包み込むような環境のなかで、彼女は自身の声を見つけ始めた。最初はためらいがちに月経や衛生に関して質問し、次第に自信を持って自身の考えを共有するようになった。年の終わりには、彼女はもう隅で黙って座っているだけの女の子ではなく、彼女はメンターとなり、以前は自身も恐れていたのと同じ道りを歩む新たな参加者を導いていた。その変化を観察していた彼女の母親は感嘆した: 彼女はMeronが一生誰かに頼り続けると思っていたが、今では彼女が先頭に立つ姿が見える、と述べた。

その波及効果は個人の成長を遥かに超えるものだった。長年見過ごされていた現地のOPDが実質的な影響力を持ち始めた。

政府関係者が初めて彼らをSRHR計画会議に招き、その専門性と包摂的な政策推進における重要な役割を認めたのだ。それまで障害のあるユースのニーズを考慮せずに運営されてきた保健センターは、彼らのサービス利用状況を追跡し始め、不可視状態から認知へと転換を示した。今までSRHRに関する話し合いを避けていた家族は、時に困難を経験しつつも必要な率直な話し合いを設け始めた。それらのテーマに沈黙を保っていたコミュニティリーダーは、自身の権利を理解し無視されることを拒むユースの声から挑戦を受けることとなった。

だが、変化への道にはいくつかの障壁が存在した。交通手段は今も残る障壁であり、特に遠方で利用可能な選択肢が少ない地方部では深刻であった。正式なプロジェクト終了後に変化の勢いが衰えないようにするには、政府パートナーとの連携強化が求められ、包摂を個人のアクターの善意に委ねるのではなく、政策に組み込む必要があった。そして、深く浸透し、世代を超えて強化されてきたスティグマは、一夜にして消え去るものではなかった。しかし基盤は今、整えられている。今まで声を聴いてもらえなかった人びとが発言し、二度と沈黙させられることはなくなった。



描写の変化

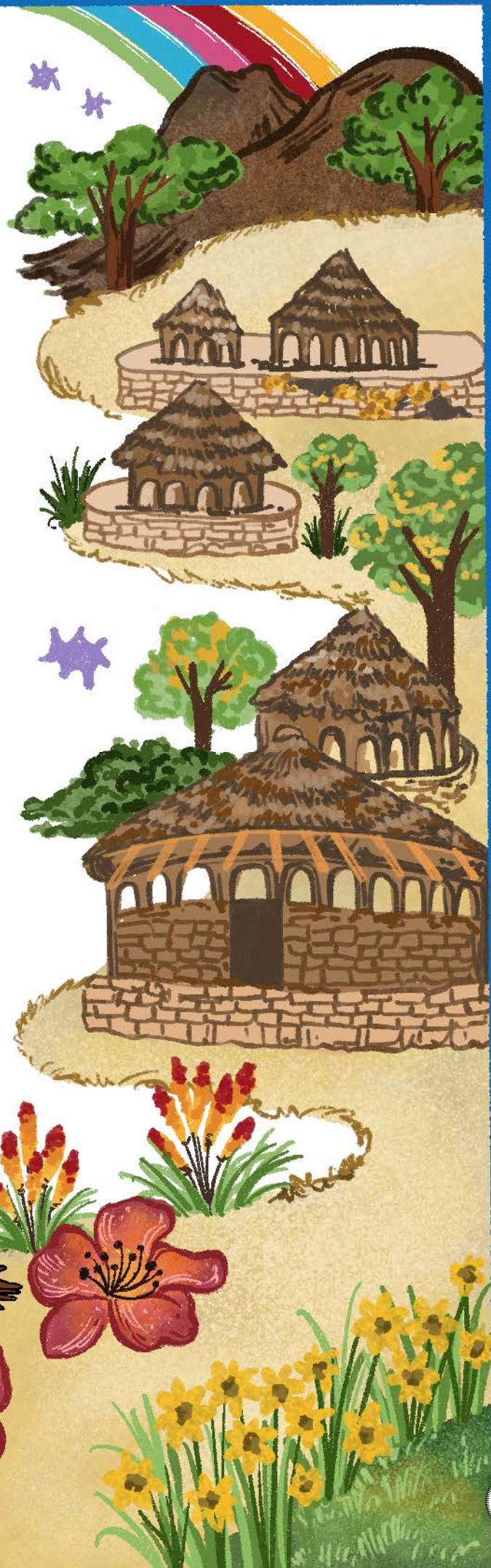
Yene-Raey 2は変革の場を創出し、障害のあるユースが自身をアドボケート・意思決定者・リーダーとして捉えるよう促すことに貢献してきた。また、障害に対する社会の認識を変え、可視化・対話・行動を通じた長年信じられてきた誤解の打破を成し遂げた。

かつて沈黙が支配していた場所で、長い間無視されてきた声がよく聴かれ始めた。

今後の展望

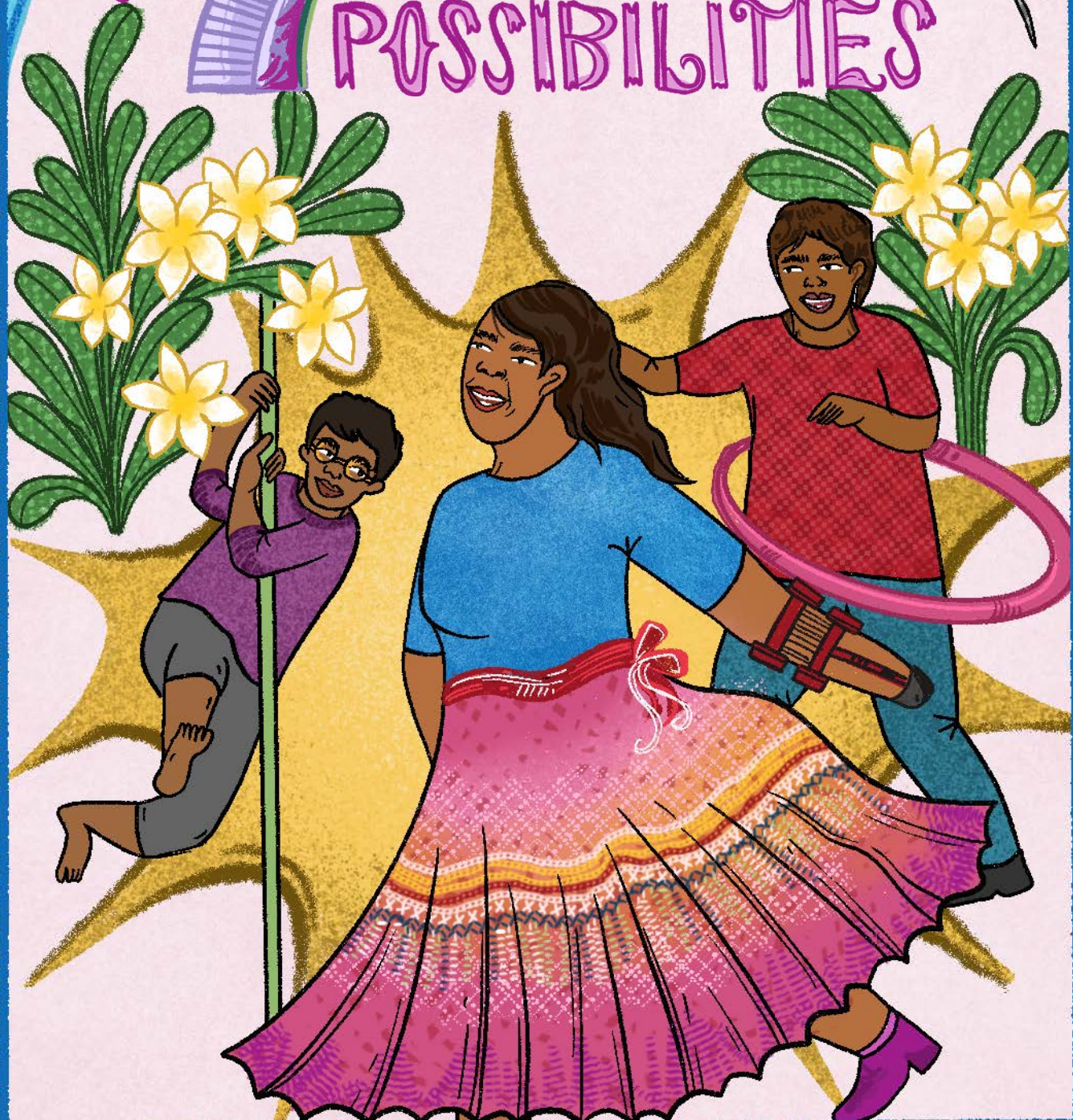
プラン・インターナショナル・エチオピアとそのパートナー団体が将来を見据えるなかで、課題となっているのは事業規模の拡大だ。綿密な記録・政府関係者との継続的な連携・障害のある人の包摂に対する揺るぎない取り組みにより、このモデルはより多くのユースに届き、より多くの支援者を育成し、障害のある人びとの包摂に考慮したSRHRを国の制度に定着させる可能性を秘めている。

変革は、必ずしも派手なものでも、あからさまなものでもない。それは静かで、さりげないものであり、一杯のお茶やコーヒー、安心感と勇気に満ちた空間、そして耳を傾け、その後に行動を起こそうとする姿勢から始まることもある。そうして、小さな始まりから着実に成長し、意義ある成果へとつながる変化を育んでいくものになる。障害のあるユースが話し合いを主導するとき、将来は単なる「包摂」にとどまらず、真に変革的なものとなる。それは、誰の声も聞き逃されることなく、いかなる権利も否定されることなく、いかなる夢も手の届かないものではない未来だ。



LAOS

TRANSFORMING
POSSIBILITIES



要約

本物語は、プラン・インターナショナル・ラオスでのMBMF2プロジェクトにおいて、障害のある人びとに包摂的なジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチを統合した取り組みを考察する。同プロジェクトは2023年に開始したWWDAとの戦略的連携による、長い歴史を持つ障害のある女の子向けの職業訓練プログラムへのCSEの導入を行った。

2024年初め、ラオス地方部の、その多くが少数民族である女の子19名が変革への旅に出た。その経験は職業技能だけでなく、月経・避妊・身体の自律性に関する教育も提供した。安全で信頼できる環境下でSRHR情報を提供し、全面的なケアの提供により彼女たちを支援することで、同プログラムは包摂に対する体系的・文化的障壁の両方に挑んだ。

この取り組みは、障害のある人びとに包摂的なSRHRには並行的な制度が不要であることを実証している。これは、現地機関への投資・OPDとの有意義な連携・文化に配慮した実施により、成果を上げることができる。長年孤立を経験し、同取り組みに参加したモン族のユース女性であるMaimuaの事例は、この取り組みが人生を変えるほどの影響力をもたらすことを物語っている。

ラオスの事例は、エンパワーメント・コミュニティ参加・長期的連携を基盤とした障害のある人びとに包摂的なSRHRへの拡張可能かつ持続可能なアプローチを示している。

周縁から中心へ: ラオスの障害のある女の子の可能性の再考

山岳地帯であるラオス北部の地方部は、民族的に多様でインフラが制限されており、障害のある女の子の多くが長年、国家の教育・健康施策において見過ごされてきた。本物語は、MBMF2プロジェクトが2023年にWWDAとの提携により、その状況を変えた経緯を示す。職業訓練とCSEの統合により、同プロジェクトは彼女たちが自身のニーズと可能性を認識できる、知識・技能・自信を獲得できる場を創出した。

MBMF2は信頼できる現地機関と提携し、特化した協働的取り組みを採用した。このパートナーシップは、職業訓練と並行してSRHR教育を実施する体制を構築し、障害のある人の包摂がこの取り組みの根幹に組み込まれることを確保し、障害のある学習者が活躍できるよう力を与えることを目的とした。このストーリーは、その決断が、長年排除されてきた女の子に新たな道を開いた経緯を記録したものだ。

ユースの国でありながら、あまりに多くのユースが置き去りにされている

ラオスは人口の半数超が20歳未満の、若さに溢れる国である。また、東南アジアで最も民族多様性の高い国の1つでもあり、49の民族集団が公認されている。教育と健康領域で進展がみられるが、多くの思春期の若者、特に女の子と障害のあるユースは、今もSRHRに関する正確な情報やサービスの入手・利用に対し、重大な障壁を経験している。

2015年の国勢調査によると、16万人超の障害のある人が確認され、移動手段がない地方部で最も割合が高いという。ラオス政府は障害のある人の権利保護に関する法律を制定し、CRPDを批准しているが、特に思春期の若者への利用可能で包摂的なSRHRサービスの提供に関して、その実施には依然として大きな課題が残されている。

MBMFの第1段階で、障害のある思春期の若者の多くがコミュニティレベルの活動から排除されていることが判明した。スティグマを恐れる家族や、娘にSRHR教育は不要であると考えていた家族もいた。そうした問題を認識したMBMF2チームは第2段階で異なる手法を採用し、WWDAとの協働により、障害のある人びと主導の長期職業訓練プログラムにCSEを組み込むようにした。

MAIMUAの道程

参加者の1人、ボーケーオ県のモン族の25歳のユース女性Maimuaは、同モデルの課題と可能性を示している。彼女には複数の身体障害があり、小学校3年生までしか就学できなかった。通学距離と、授業参加のために支援を受けられず這って行かなければならなかった身体的負担から就学を辞めたという。家では家事を手伝い、独学で刺繍を学んでいた。障害のある人びとのための村集会在告知された際、Maimuaは参加した。そこで彼女はWWDAでの機会を知り、家族とコミュニティの支援を得て、彼女は登録した。

彼女はWWDAで、手工芸だけでなく、月経衛生や避妊等、SRHRの必須テーマに関しても指導を受け、それらの多くは彼女にとって全く新しい知識だった。彼女は初めて月経用ナプキンを使い、多目的トイレを利用し、自身の健康について率直に話すことができた。「今は自信ができました。今までは自身の月経管理の仕方すら知らなかったのですが、今は自分で自分自身のケアができるようになりました」。

彼女の体験談は、SRHRを障害に配慮した空間に取り入れることが、複数の障壁を同時に解消し得ることを示している。



成功の要素とは

同取り組みの成功の実現可能要素は複数ある。第1に、WWDAの実績と信頼性のおかげで、各家庭は娘の参加を快く受け入れた。WWDAが長年にわたって行ってきた一貫した活動で築き上げた信頼が、重要な入り口となった。第2に、住居・食料・心理社会的ケア・SRHR教育に至るまでの包括的支援の提供により、女の子が常態的な生きるための負担に苛まれることなく、学びと成長に専念できる環境が整えられた。

医療連携も重要要素の1つであった。訓練を受けた医療従事者をCSEセッションに関与させることで、情報とサービス利用の間に多々存在する重大な隔たりを埋めた。女の子は彼らに直接質問でき、即座に情報に基づく回答を得ることができた。その取り組みはSRHRに関する知識を深めただけでなく、プログラム外でサービス利用を求める上での自信も育んだ。

参加者の選定も重要であった。コミュニティリーダーと家族を関与させた参加型手法により、支援を最も必要とする女の子が特定され、彼女たちのプログラム参加を保証した。そして、保護に関する研修から政策策定に至る、WWDAの機関としての能力への投資が、MBMF2期間中に実現した変化をプロジェクト終了後も持続可能にした。

発展の姿とは

同プロジェクトの成果は、参加者が報告した自信とセルフケアの向上、および娘の健康と幸福感に明確な改善を認めた彼女たちの家族からの肯定的な意見から明らかであった。WWDAにとって、SRHRの職業訓練への導入は、一層包括的な教育への転換となり、利害関係者が高く評価するようになった。

課題も現れた。保護の強化と包摂的な制度への適応には予想以上に時間を要した。言葉の壁、特に少数民族の参加者に対し、配慮ある翻訳と文化的考慮が求められた。同モデルは有望ではあるが、より多くの人へ提供するためには、新たなリソースと幅広い連携が求められる。

特に革新的であった点は、新たな組織の設置ではなく、既存のOPDへの投資の決断である。その手法により、統合が一層円滑で持続可能なものとなった。医療従事者のCSEセッションへの直接関与も、効果的な戦略の1つであった。そして知識の欠如だけでなく、体系的・感情的障壁へも対応したプログラム設計が、長年の排除に対する包括的な解決策であることが証明された。





静かな変化

ラオスでのMBMF2の取り組みは全国的な話題とはならなかったかもしれないが、長年排除された女の子の生活に静かでありつつも有意義な変化を与えた。障害のある人びとの包摂は、複雑でも費用がかさむものでもなく、意図的で献身的な行動が必要とされるものであることを示した。

この物語の核心は、主体性の構築にある。この取り組みは、障害のある女の子の本来的な価値と権利を認め、彼女たちが自らの未来を切り開くための知識、スキル、そして支援を提供した。SRHR教育の職業訓練との統合により、彼女たちが自身の健康・身体・人生に関し、情報に基づいた決断を下せるよう力づけたのだ。

何かを新設するのではなく、WWDAの信頼できる基盤をMBMF2の土台とし、既存のコミュニティの絆を強化させ、女の子が安全に成長・主導できるスペースを創出した。同取り組みは、真の変化がコミュニティ主導の取り組みから生まれることが多いことを示すものである: ボトムアップの取り組みである。

生み出された変化は持続可能なだけでなく、変革的なものである。障害のある女の子は見過ごされる存在から、自身の力でリーダーとなる存在へと変化した。Maimuaのような女の子はもはや例外ではなく、長年疎外された人びとのリーダーシップに投資した際に実現し得ることを示す好事例となった。

同取り組みは、知識が贅沢品ではなく基本的権利であることを示した。彼女たちに自身の人生を導くツールを付与することで、彼女たち個人レベルを超えた、コミュニティの再構築と、長年維持されていた障壁を打破する波及効果が生まれ始めた。

真の変革は盛大である必要はない。それは、長期間、リーダーにはなれないと言われてきた人びとの静かながらも力強い変化のなかにこそ見出される。あらゆる女の子が力を得られるようにし、私たちは単により包摂的な世界を築くだけでなく、歴史的に彼女たちの足を引っ張ってきた仕組みそのものを変えていくのだ。

展望

次の目標は規模拡大である。得られた知見の記録・政府関係者との連携強化・広範な導入の提唱により、同モデルはより広域の多くの女の子に提供できるようになる。それはラオスだけでなく、障害・ジェンダー・不平等が交差するあらゆる状況での指針となる。障害のある女の子のリーダーシップへの投資は、サービス改善だけにとどまることなく、力関係を変え、未来を切り開き、可能性の枠組みそのものを変革し始めるのだ。



MOLAMBIQUE

TRANSFORMING LIVES



要約

プラン・インターナショナル・モザンビークのMandzikuプロジェクトは、同国でのジェンダー・トランスフォーマティブと障害のある人びとの包摂を重視したSRHRの取り組みに向けた先駆的な転換点となっている。特に障害のある思春期の若者たちが長年にわたりスティグマ・誤情報・SRHRサービスへのアクセスに重大な障壁を経験してきたジャンガモ地区で実施されているMandzikuプロジェクトは、それらの障壁を根底から解消する大胆な一歩を踏み出した。

この物語では、同プロジェクトが仲間主導のChampions of Change(CoC)クラブを育成するための革新的なアプローチや、包括的なサービス提供への取り組み、さらにはFAMODなどの組織との強固で協力的なパートナーシップの構築について紹介する。そうした取り組みを通じ、同プロジェクトは障害のある人びとを含む850名超の思春期の若者とユースを直接関わってきた。同プロジェクトは、世代間対話・医療従事者向けの包摂的な研修・草の根レベルのコミュニティ動員などの取り組みを通じて、SRHRに対する認識を変え、SRHRの議論・その提供方法・障害との関連性の再定義に貢献している。

結果は明白である。現在、ユースの96%がSRHRサービスの場所と利用方法を正確に把握している。思春期の若者の自信と主体性には著しい向上がみられ、ユース向けで包摂的な保健サービスは今までになく利用しやすくなった。その変革の核心にあるのは、連帯を育み、障害のあるユースも完全に参加できるように支えるユースの力への確固たる信念だ。Mandzikuの物語は、エンパワーメントと連携・沈黙から主体性の発揮への劇的な転換の物語である。最も疎外された人びとの声を中心に据えることで、同プロジェクトは真に持続可能な変化が可能であることを証明した。このアプローチは、同地域におけるジェンダー平等と障害者の社会参加を推進するための、拡張性と再現性を備えたモデルを提供し、誰一人取り残さないことを保証している。

沈黙が破られる時: ジャンガモでの変革の始まり

太陽に照り付けられた広大なジャンガモの遠隔地では、SRHRに関する会話は沈黙に包まれていた。同地域の村の片隅では、そうした話題はほぼ語られず、たとえ話題に上がったとしても口にするだけで体がタブーであるかのように、密かに囁かれるだけだった。思春期の若者、特に障害を抱えて生活している者にとって、そうした重要な会話は不快感や疎外感、時には完全な無理解を経験するものだった。

女の子は沈黙が求められ、彼女たち自身の身体は彼女たちのものではないとする社会規範により、彼女たちの声は長年封じられていた。一方、男の子はジェンダーや性に関する有害な信念や態度について問われることはほぼなかった。障害は往々にして同情の目で見られ、社会参加への乗り越えられない障壁とみなされ、可能性・潜在能力・平等の視点からは、決して捉えられてこなかった。

前プロジェクトが築いた基盤とLight for the Worldとの連携を基盤とし、2023年に同プロジェクトは眼に見える形で、著しい勢いが生まれ始めた転換点を生んだ。

それは最初は小さく、ほとんど気づかないほどの波のように始まった。勇敢な人びとのグループが地元の集いの場に集まり、物語やアイデアを分かち合い、それが徐々に大きな運動へと発展していった。こうして誕生したのがMandzikuプロジェクトであり、以前の取り組みであるWutomiプロジェクトから得た教訓に基づいて構築されたものである。当初はSRHRの格差解消を目的とした計画的な取り組みとして始まったものだが、やがてコミュニティ全体に波及する変革のきっかけとなった。

同プロジェクトは単なるサービス提供ではなく、それらのサービスの基盤そのものの変革であった。性に関する理解の変化・根深い力構造の解体・ユース、特に障害のある者にとって何が可能なのか、再考することだった。同プロジェクトの取り組みは明確な信念に基づいていた。すなわち、真の変化には、最も頻りに排除されてきた人びとを含めなければならない、という信念である。同プロジェクトはSRHRサービスのアクセス拡大だけでなく、権力関係と意識の変革にも焦点を当てていた。また同プロジェクトは、連帯を育むユースの力に根ざしており、障害のあるユースがコミュニティへの完全な関与と変化の担い手となれるようにすることを目指した。

今、ジャンガモ内を歩けば、誰もがその変化に気づく。以前は沈黙に包まれたSRHRに関する話し合いは、今ではよりオープンで身近なものとなった。ユース主体のCoCクラブは、活発な議論や行動の中心地となっているこうした仲間同士で運営するグループでは、ユースが集い・学び・経験を分かち合い・互いに刺激し合うことで、対話の場としての安全な空間が生まれた。そこでは、嘲笑されることを恐れずに質問ができ、女の子が率直に意見を述べたり、少年たちが時代遅れの考え方に疑問を投げかけたりするよう後押しされている。

その変化はユース自身の間を超えた広がりを見せている。以前は障害のある思春期の若者の特有のニーズの理解のための訓練を受けていなかった医療従事者も、今では障害に配慮したユースが利用しやすいサービスの提供のための知識と技能を備えている。

ジャンガモで、今までSRHRを取りまいていた沈黙が、教育やサービス、そして何よりも尊重される権利を訴えるユースの力強い声へと変わりつつある。同プロジェクトは、最も疎外された人びとが主導できるよう力づけられた場合、コミュニティ全体が恩恵を受けることを示した。

包摂・主体性・勇敢さの物語

自身のコミュニティにCoCクラブが設置されるのを初めて知ったのは、Miguelが24歳の時だった。先天性の身体障害のある彼は、他人には到底理解できないような困難に常に直面してきた。就学していた学校は自宅から遠く、障害物だらけの通学路での通学は彼にとって克服し難い困難だった。早期に中途退学をせざるを得なくなり、Miguelは孤立し、無能者の烙印を押され、学び・成長する機会から締め出された。教育を受ける機会を得られず、更に重要なことに、自身の権利について理解することさえなく、ましてや自分のSRHRについてはなおさらだった。

MandzikuのチームがMiguelに接触した際、彼の母親が躊躇したのも当然だった。彼女は、「なぜ彼のようなユース男性が、性に関するクラブに参加すべきなのか」と疑問を示した。だがチームは諦めずに、送迎と安心感・何よりも支援を提供した。彼らはMiguelが、自身に能力があるだけでなく、その話し合いの場にいる価値のある存在だと感じるようにさせる、と決意していた。最終的にMiguelは参加に同意し、その決断は彼にとってもコミュニティにとっても、大きな変化の始まりとなった。

「今まで孤立して暮らしていました」とMiguelは静かな誇りを帯びた声で語った。「今は友人がいて、尊重されていると感じ、差別は少しずつ減っています」。

Miguelの変化は、同プロジェクトがジャンガモで巻き起こしていた広範な変化の生きた証となった。10のコミュニティ内に21のCoCクラブを設置させることで、850名超の思春期の若者とユースが集い始めた。彼らはSRHRに関する話し合いのためだけでなく、根深いジェンダー規範と向き合い、同意や避妊の概念を探求し、そして、恐らく最も重要なこととして、自身の権利を知るために集まっていた。

CoCクラブは単なる教育的なスペースに留まらず、個人の変化を促す場となった。

Miguelのようなユースは、自身のアイデンティティや価値をもはやスティグマや排除で定義付けられるものではなく、自身や仲間を新たな視点で見るよう学んでいた。そうしたクラブで、彼らは体験談を語り合い、互いに助言し合い、置かれた状況を超えた絆を築いた。クラブを通じて、彼らは自身が1人ではないこと、そして自身にも未来を切り開く権利があることを実感した。

2023年末までに、その変化は明らかになっていた。情報に基づいたSRHRに関する決定を下すことに自信があると回答したユースは、同年初めの僅か45%から65%に増加した。有害なジェンダーステレオタイプに挑む準備ができていると感じているユースも、開始時は僅か24%だったが、60%へと著しく増加した。こうした変化は単なる統計上のものに留まらず、参加したユースの考え方や主体性での、実際の、生きた変化を反映していた。

しかし、それらの変化は決して偶然ではない。障害のある人びとの包摂・ジェンダー平等・ユースのエンパワーメントという原則に基づいて、慎重に設計されたコミュニティ主導の取り組みの成果であった。同プロジェクトは単なる情報提供に留まることなく、ユース、特に長きにわたり疎外されてきた者が、自身の声と権利を取り戻せるような環境を築くことを意図して作られていた。

同プロジェクトが、コミュニティ主導の変革の力を示すものであり、最も疎外された人びとが主導する手段を与えられた場合、コミュニティ全体が恩恵を受けることを証明した。

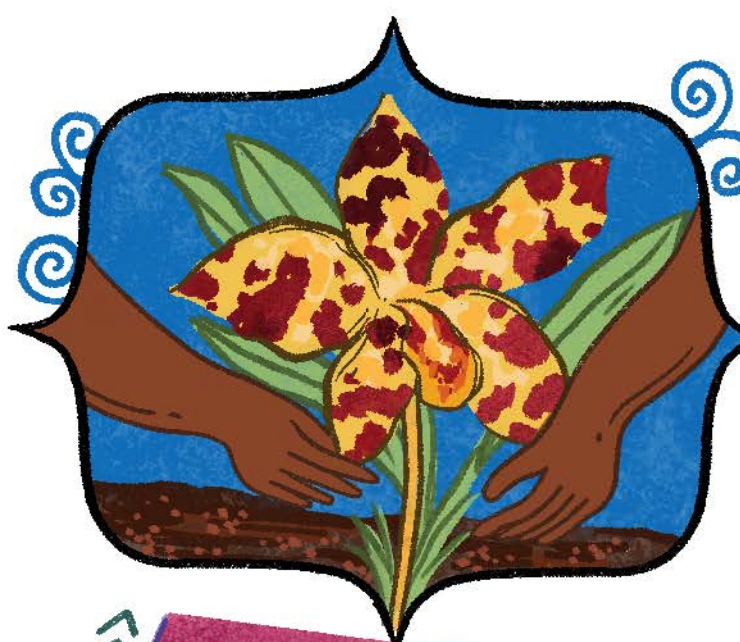


成功の要素とは

Mandzikuプロジェクトは、本質的には「人と人との関係性」をめぐる物語であった。そこには、ユースと自らの身体との関係、保護者と子どもとの関係、そしてコミュニティと、その中で疎外されてきた人々の声との関係が含まれている。

また、同プロジェクトは、他団体とのパートナーシップによって支えられ、発展してきた。プラン・インターナショナル・モザンビークは、移動型支援チームでユースに直接サービスを提供するAMODEFA・社会的タブーの打破のためのコミュニティ対話を主導するMAHLAHLE・今まで声を封じられることが多かったLGBTQI+のユースの議論への参加に尽力するLAMBDAと連携した。

恐らく最も重要な点は、FAMODを通じて連携したOPDが、主導的役割を果たしたことだろう。彼らは、障害のある若者の特定と支援を行い、包摂的なSRHRIに関する研修を実施し、制度的な変革を働きかけた。こうした活動を通じて、Miguelのようなユースが、長年利用を拒まれてきたサービスを受けられるようになった。



個人だけでなく、コミュニティそのものを変える

変革はCoCクラブだけに留まらず、家庭・学校・宗教施設へと広がり始めた。コミュニティリーダーや宗教指導者も対話に参加し始めた。かつて月経や避妊等のテーマに不快感を感じていた保護者も、質問し・耳を傾けるようになった。

世代間対話は、その変化の基盤となった。ある世代間対話のセッションに、父親126名、息子117名、母親46名、娘47名が一堂に会した。多くの人にとって、世代を超えて性に関して率直に話し合うのは初めてのことだった。以前は子どものCoCクラブへの参加に躊躇していた保護者も、今では参加を促すようになった。

医療制度さえ変化を見せ始めた。6カ所の思春期の若者とユースに配慮した医療サービスが、移動に困難を伴う思春期の若者のためのスロープや個室など包摂的なインフラ設備を整備した。75名の医療従事者が、臨床手技だけでなく、共感と敬意を持って差別なく患者とコミュニケーションをとる方法の訓練を受けた。成果は明白だった。現在96%のユースがSRHRサービスの場所と利用方法を把握している。2023年だけで、障害のあるユースやLGBTQI+コミュニティのユースを含む3万9,000人以上のユースがサービスを利用した。

学んだこと

数多くの成功が得られた。仲間主導のモデルはうまく機能した。かつては存在しなかった信頼が育まれた。コミュニティリーダーたちはユース、特に疎外されたユースを変化の担い手として見始めるようになった。包摂的なサービス提供は単なる付加的なものではなく、基盤そのものであった。データによると、すべてのグループでSRHRの知識・利用状況・自信が著しく高まったことが示された。

だが、不十分な点や課題も認められた。男性の議論への参加率、特に月経衛生に関しては、低いままであった。家父長制的規範が、依然として誰が発言し、誰が傾聴し、誰が行動するかを決めていた。前進がみられたとはいえ、障害のある思春期の若者がSRHRに公平にアクセスできるべきだと考えるコミュニティメンバーは僅か42%で、12%から改善したとはいえ、依然として公正とはほど遠い状況であった。

しかし、その種はすでに蒔かれている。Miguelのような物語、そして彼の背後にいる何千もの人の物語が、意図的に包摂が行われ、変化がコミュニティ内で推進される時に何が実現できるかを示す生きた証拠である。

一過性の出来事ではなく、運動である

同プロジェクトの物語は、尊厳と公平がどんな姿となり得るかという構想を実現化させる取り組みと関連している。かつては沈黙がユースの日常を支配していた場所で、今や彼らは堂々と声を上げている。彼らは問いかけ、答えを求め、互いに支援しながら自身の将来を形成している。

変革には時間と信頼、そして団結が必要だ。それは単なるサービス提供だけでなく、その利用を阻む規範や信念、障壁を取り除くことが求められる。そして、最も頻繁に取り残されてきた人びとのリーダーシップなしでは実現不可能である。

この物語は説得力ある道筋を示している: コミュニティが包摂を最優先に掲げ、ユースのリーダーに力を与え、根底から不平等に立ち向かうとき、真の変化が生まれ、その動きは止まることなく前進し続ける。

MYANMAR

TRANSFORMING NORMS



要約

政治的に不安定で紛争の影響を受けている状況下のミャンマーで、MBMF2プロジェクトは障害のある人びとの社会参加を促進する取り組みの強化のため、コンサルティングパートナーとしてTLMMIに連携した。また同プロジェクトは、現地でSOGIESCを中核とする団体Kumudraと戦略的パートナーシップを構築し、包摂的なSRHRに対する草の根での取り組みを採用して、実践での交差性への取り組みを推進した。

本物語は、コミュニティ啓発ワークショップ・ピア主導の教え伝え研修・SRHR小委員会の設置の組み合わせにより、障害のある人びとに対するスティグマへの挑戦・権利擁護・医療と法的サービスへのアクセス向上により、同プロジェクト実施が成し遂げた重大な前進に焦点を当てている。それらの取り組みは、障害のある人びとの社会参加に向けた個別の行動計画を策定し、体系的に実施された。この取り組みの中核は、個人とコミュニティレベルの両方の能力構築を伴う、障害のあるユースのエンパワーメントにあった。

内戦という困難な状況下であったが、同プロジェクトは2024年に139名のコミュニティ住民に効果的に働きかけ、包摂に対する意識変化を促した。障害のある人びとに包摂的なSRHRプログラムは、そうした制約の多い状況下でも実施可能であるだけでなく、現地主導の信頼に基づく、人権の原則に確固として根ざしたものであれば成功裏を収め得ることを実証した。持続可能な変革を実現するため、MBMF2は包括的な行動計画を現行の戦略に組み込んだ。この計画には、現地の利害関係者への継続的支援・SRHR小委員会の強化・能力開発活動の拡大が含まれており、これにより、包摂的な取り組みがコミュニティ構造に深く根付くようにした。

変革の火花: ニャウンウーでのSRHRの奪還

ミャンマーでは、SRHRは、依然としてデリケートなテーマであり、障害のあるユースにとってはなおさらである。彼らの多くが、インフラ面での障壁だけでなく、根深いスティグマや体系的な無関心により、情報やサービスへの基本的なアクセスさえも阻まれてきた。MBMF2プロジェクトはその状況改善を目指した。

社会的規範の変革には、単なるサービス提供以上の取り組みが必要であることを認識した上で、MBMF2はTLMMI・Kumudra・ニャウンウーの現地コミュニティと連携し、包摂に関する対話と行動を促進した。その目的は、意識啓発だけでなく、コミュニティが、障害のあるユースを含む社会的弱者のSRHRを、コミュニティ全体の優先課題として推進できるよう支援することであった。

脆弱な状況下での障壁の解消

ミャンマーはCRPD・CEDAW・CRC等の主要な国際条約/政策を批准してはいるが、政策と実践の間の隔たりは依然、深刻である。障害のある人びと、特に女性と女の子は、生活のあらゆる面で疎外を経験している。UNFPAと現地のOPDによると、障害のある人はSRHサービスを利用できないことが多く、正式な紹介体制が整っておらず、妊産婦医療の普及率も低いという。

憂慮すべきことに、過去5年間で妊娠した障害のある女性の内、妊産婦医療サービスへの紹介を受けたのは、僅か18%だった。2021年の軍事クーデターと継続中の内乱により、基本的なサービスへのアクセスは一層困難になり、MBMF2の活動は一段と困難となると同時に、緊急性を帯びたものとなった。



障害のある人に包摂的なSRHRに向けたコミュニティ主導の取り組み

ミャンマーでのMBMF2プロジェクトは、コミュニティ住民と共に策定した行動計画に基づき、コミュニティ住民主導のコミュニティベースモデルの採用を中核に据えた。並行的な制度の構築や正式な医療アクセス体制への注力ではなく、同プロジェクトは意識変革・啓発活動・草の根レベルの能力構築を優先事項とした。そのモデルはプラン・インターナショナルのジェンダー・トランスフォーメーションという目標とも強く合致したものだ。

広範なジェンダー平等推進のための取り組みに、障害のある人に包摂的なSRHR教育を組み込むことで、同プログラムは重複する疎外の形に対応した。村レベルで開催されたワークショップや振り返りの場では、ジェンダー間だけでなく、障害のある人とない人の間の力関係の不均衡にも取り組んだ。

重要なのは、障害のあるユースが、受け身な存在ではなかったということだ。彼らはピアエドゥケーターやリーダーとして訓練を受けた。事実、プロジェクト期間を通し、彼らの多くが訓練セッションや啓発活動に参加した。

そして、それらのユースの中には、ピア・グループのメンバーとなり、村内の他の仲間にSRHR情報を共有する主導的役割を担う者もいた。それにより彼らの社会的地位は向上し、彼らの自信も高まり、コミュニティが彼らの意見に対する評価に変化が生まれた。

実践の成果はさまざまな形で現れた。

- * 139名が初回の啓発ワークショップに参加
- * OPDメンバーは進行や提唱の役割を担った
- * コミュニティ住民の意識の変化がみられ、それは追跡インタビューや、障害のある人びと主導のイベントへの参加率の増加からも明らかになった
- * 現地のSRHR委員会がその取り組みの普及に貢献した

ある保護者の証言がその影響を最もよく表していた:「娘がそんな知識を必要としていたとは知りませんでした。今では、彼女が私に権利と尊重について教えてください」。



パートナーとの連携によるコミュニティ行動計画の策定

ミャンマーでのMBMF2の成功の鍵は、連携であった。障害のある人びとの包摂に関する専門知識を持つTLMM¹は、SOGIESCを中心に据えた活動を行うNGOであるKumudraと連携し、包括的で交差的な取り組みをプロジェクトに盛り込んだ。ニャウンウーにおける彼らの長きにわたる確固たる基盤のおかげで、このプロジェクトは既存の信頼関係やネットワークを迅速に活用することができた。TLMMが現地のOPDと築いた関係は、障害のある人のコミュニティ内で信頼され認知度の高いピアリーダーの特定に寄与した。彼らは研修教材を共同作成し、文化的・言語的な実情に合わせて内容を調整した。そのプロセスによって、単なる代表制にとどまらず、真の共同所有が実現された。

同プロジェクトは、地元の医療従事者や村レベルの当局も巻き込んだが、そのなかには当初、懐疑的だった者もいた。

度重なる関わり合いと、主体性を持った障害のあるユースの存在が広く知られるようになるにつれ、それらの関係者は協力に対してより前向きになり、コミュニティでの障害のある人びとの包摂を推進するための行動計画を策定した。

政治的危機により地方自治体との連携は困難を極めたが、TLMMとKumudraはプロジェクトを現地コミュニティ主導の取り組みに焦点を当て続けるよう尽力した。目立たない形で、信頼に基づくアプローチをとることで、同プロジェクトは関係構築に成功し、物議を醸している公的機関への依存を回避できた。このプロジェクトにおけるパートナーシップ活動がもたらした成果は、単なるプログラムの成功に留まらず、SRHRの議論において、誰が知識と力を握っているのかという点を再定義することであった。同プロジェクトが軌道に乗るにつれ、障害のあるユースは周縁から中心へと歩み出し始めた。彼らのリーダーシップと決意がSRHRへのアクセス拡大を促進し、彼ら自身の人生とコミュニティを変革した。



1. 2022年と2023年に、TLMMはプロジェクト職員を対象に、障害者の社会参加に関するトレーナー養成研修を実施し、参加型障害者ワークショップのデータ収集プロセスを支援した。

学びと考察

障害のある人びとの社会参加に向けた行動計画の実施と、その推進を担うピアリーダーに対する支援は、費用対効果が高いだけでなく、変革的なものだった。身体障害のある22歳のユース女性Zin Marはピアエドゥケーターとして任命された当初、自身の意見が重みを持つのかと疑っていた。だが数週間の内に、彼女はセッションの進行役を務め、内気な参加者に質問を促し、他の参加者が自身の声に自信を持てるよう手助けするようになっていた。彼女のリーダーシップは女の子を鼓舞しただけでなく、障害のある女性に対する社会の決めつけ自体に挑戦するものであった。

多くの参加者は、自身と「同じような」人からSRHRに関するメッセージを聞くことが、当初持っていた違和感や不信感の解消に役立った、と指摘した。それがテーマに人間味を与え、安心感を生み出したのだ。セッション後の調査では、参加者の70%超がSRHR関連のテーマについて話しやすくなったと回答し、さらなる情報や紹介先を求めた者も何名かいた。

波及効果は研修室を超えて広がった。ピアエドゥケーターは喫茶店や女性グループの集会で非公式な話し合いを運営し始めた。学んだことの共有のために現地ラジオ局で番組を担当する者や、新たなエネルギーを得てコミュニティに帰り、SRHRが日常の話題となるよう働きかける者もいた。

そうした成功がみられたが、課題は依然として残っていた。繰り返し起きていた問題の1つは、交通手段であった。遠隔地や紛争の影響を受けている地域に住むユースにとって、中央に位置する研修所へ行くことは困難で、時には危険を伴うこともあった。それは、最も疎外された人びとに支援が提供されないまま取り残されることを意味していた。

スティグマ、特に障害のある人の性に関するものは、依然として厚い障壁のままである。

コミュニティリーダーのなかには、SRHRに関する話し合いは不道德な行動を助長するとし、同プロジェクトに抵抗した者もいた。そうした考えを変えるには、何度も対話を重ね、時には尊敬されている年長者の仲介が必要だった。

政治的状況もまた、医療従事者との公な協力を困難にした。監視・報復への恐れから当局の関与は限定的であり、医療サービスの提供は限定的なままであった。それは、コミュニティに根差したアプローチの重要性を浮き彫りにした一方、正式な制度の枠組みの中で変化を定着させることができないという限界も浮き彫りにした。

革新

本物語の真の革新性は、その謙虚さと適応力にある。外部モデルを押し付けるのではなく、チームは語りや仲間同士の対話といった既存の社会慣行を巧みに取り入れ、内容を現地コミュニティにとって理解しやすく、かつ意義のあるものに仕上げた。あらゆる活動が現地のニーズや要望と密接に連動にするよう配慮され、すべてがコミュニティと共同策定した障害のある人びとの社会参加に向けた行動計画の実施に根ざしていた。それらの計画は、前述の取り組みの基盤を築き、コミュニティの意識を高め、協力を得るための明確な道筋を示した。それらの計画が、障害のあるユースがSRHRのサービスや情報にアクセスできるよう、支援的な環境を整えたことは、特に重要である。

修道院や年長者の居住区等といった信頼できるコミュニティの場を活用することで、同プロジェクトはオープンな議論のための安全で中立的な場を確保し、信頼と参加意識を育んだ。同様に、保護者の研修への参加は、障害のあるユースの多くが移動・コミュニケーション・サービスへのアクセスに家族の支援を必要としていることを認識した上の措置であり、そのため同プロジェクトは、ユースの自律性を損なわせない形で、保護者を意図的に巻き込んだ。

この2つのアプローチを並行して進めることで、過度の保護を効果的に減らしつつ、同時にSRHRがあらゆる人にとって基本的な権利であるという共通認識を構築した。

同様に重要だったのは、現地レベルのSRHR小委員会の設置であり、これらは単発イベントに留まらない学びの継続に有効だけでなく、障害のある人びとの包摂に関する配慮をコミュニティの継続的な活動に確実に組み込む上で極めて重要であった。それらの小委員会は引き続き独立して活動しており、人びとの包摂に関する明確な原則を中核として設計されている。彼らはSRHRの枠組み内で障害のある人の権利の提唱活動を行い、アクセシビリティ・包摂・障害のある人びとと特有のニーズが、あらゆる議論と意思決定に確実に組み込まれるよう取り組んでいる。彼らの継続的な活動は、同プロジェクトが単にその内容を展開しただけでなく、現地のリーダーシップを育成し、コミュニティがSRHRの課題に主体的に取り組めるよう支援し、障害のある人びとの包摂が対話の中心となる場を構築したことを物語っている。

包摂的な将来に向けて

ミャンマーでのMBMF2の取り組みは、最も脆弱で困難な状況下でも、障害のある人びとの包摂は可能であるだけでなく、必須であることを強く証明している。コミュニティの意識改革から着手し、現地のリーダーシップ育成に投資し、取り組みの中心に人権を据えることで、同プロジェクトは持続的で変革的な変化のための強固な基盤を築いた。

同プロジェクトの一環として行われたKumudraとTLMMの連携は、活気ある協力関係と積極的な関与を生み出した。この相乗効果は、異なる取り組みを行う組織が結束することで、有意義な変化をもたらす得ることを示している。今後を見据えると、政府体制や医療従事者とのより深い関与が重要となる。しかし、進むべき方向はすでに明確である。真に意義ある障害のある人びとの包摂は、傾聴・学び合い・あらゆるユースの主体性の尊重から始まる。ミャンマーでは、その信念が着実に根付き始めている。一つひとつの対話、各コミュニティでの取り組み、そして一人ひとりのユースリーダーの行動を通じてである。これは単なる変化ではない。可能性の概念を絶えず再定義し続ける、障害のある人びとの権利運動の強化そのものである。



UGANDA

TRANSFORMING
POWER



要約

ウガンダ北部の町々では、過去の紛争の傷跡が今もなお囁かれる物語や口に出せない恐怖として残っており、障害のあるユースは長年社会の隅に追いやられていた。SRHRに関する会話は稀であるどころか、ほとんど考えられないことだった。スティグマ・沈黙・利用不可能なサービス体制が、何世代にもわたって彼らの将来を切り開くための知識や主体性を奪ってきた。

だが、変化はすでに始まっている。I Decideプロジェクトを通じて、新たな現実が着実に広がりにつつある。ウガンダでのLIDUPEDとの連携は、単なるSRHサービスの提供に留まらず、制度の基盤そのものの変革を目指す取り組みであった。同プロジェクトは、障害のあるユースに力を与え、自身の権利を主張できるよう支援してきた。また医療従事者に対しては、治療だけでなく、患者の声に耳を傾ける姿勢を求めた。さらに、学校を対話とエンパワーメントの場へと転換し、保護者に対しても、従来の限界を超えた視点で子どもの可能性を捉え直すよう働きかけた。

本物語は、単なる変化の記録にとどまらない。レジリエンスとリーダーシップを体現し、障壁が取り除かれ、声が広がり、運動が生まれてきた過程を示すものである。その本質は、情報にアクセスする権利・自身の身体について選択する権利・社会に完全に参加する権利といった、障害のあるユースの権利と尊厳を明らかにする点にある。これは、障害が排除の理由ではなく、力と可能性の源として捉えられる未来を描く物語である。

沈黙を破り、将来を築く

ウガンダ北部のリラでは、何世代にもわたる排除を解体し、障害のあるユースの将来を書き換える、静かな変革が展開されている。長きにわたって彼らの声は封じられ、彼らのニーズは無視され、彼らのSRHRの権利は奪われてきた。I Decideプロジェクトがその流れを変えた。以前は、あってもひそひそとした会話だったものが、今はこれまで取り残されていた人びとにより主導される、力強い対話へと変わった。

本物語は、障害のある人びとに対するジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチと包摂を重視したアプローチが、実践でどう機能し得るかを示す説得力ある事例である。また、意図的な連携関係・ユースのリーダーシップ・体系的な提唱活動が一体となり、根深い障壁をいかに打破できるかを示し、同様の状況下での取り組みの指針となるものでもある。



排除の様相

ウガンダ北部には、紛争・貧困・構造的疎外によって刻まれた深い傷跡が残っている。インフラは脆弱で、基本的サービスの利用にも依然困難が存在する。学校は障害のある学習者の支援のためのリソースを欠くことが多い。保健センターは、その能力を超えて逼迫しており、包摂的なSRHRサービスが提供できる設備が整っているのは稀である。障害のあるユース、特に思春期の女の子とユース女性にとって、そうした困難や利用に対する障壁は一層深刻化している。遠隔地のコミュニティでは、未だに障害は呪いや不運であると誤解されている場合が多い。SRHRに関する議論はタブー視されており、そこに障害という要素が加われば、沈黙が常態化し、情報も支援も、自身の身体や将来に関する意思決定のための主体性をも欠いたまま成長する世代が結果として生まれてしまう。

ウガンダでは障害のある人びとの権利に関する進歩的な法的枠組みが整備されているが、その実施状況には依然として課題が残っている。障害のある思春期の若者は、コミュニティ活動・学校ベースのSRHRプログラムおよび保健サービスから日常的に排除されている。性教育が実施される場合でも、彼らのニーズを考慮して設計されていることは稀で、そのようにして、排除は続いている。

こうした背景のもとで、MBMF2のI Decideプロジェクトは、サービスの不足解消に留まらず、障害のある人びとの包摂に対するコミュニティの考え方・話し方・行動そのものの再構築を目指して立ち上がった。

新たなアプローチ: SRHRにおいて障害のある人びとを中心に据える

同プロジェクトは、単純で革新的な信念を核心に置いている: 障害のあるユースは単なる支援の受け手ではなく、変化の担い手である。このプロジェクトの優れた実践例は、障害のある人びとに包摂的なSRHRのエコシステムのモデルであり、学校・保健センター・コミュニティ・家庭の各層に浸透していた。それは短期的な介入策ではなく、障害のあるユースの実体験に根差した体制の再構想を図るものだった。

障害者包摂ファシリテーター²は皆、自身も障害を抱えており、この活動の中核的存在となった。彼らはSRHRに、包摂的で権利を基盤とし、変革をもたらす形で取り組んだ。彼らの存在は根深い偏見に疑問を投げかけた。彼らのリーダーシップは、包摂が可能であるだけでなく、必須であることを示した。

2. 以下の人物を含む: Odongo Jonathan Jimmy, Sam Oloi, Quido Onyeko, Barbra Ruth Achola, Ketty Olem, Joan Ajok, Connie Adoch, Jasper Opio.



教室では、彼らは教師と連携してModel School Healthプログラムを展開し、あらゆる学習者のニーズに合わせて内容を調整した。診療所では、アクセス性監査³を実施し、時には医療従事者と肩を並べて障壁を特定し、実践的な解決策を提案した。

彼らは単独で活動してはいなかった。30の保健センターと80の学校の、ピアナビゲーター・教師・医療従事者が勢いを増すこの運動に参加した。また、SRHRクラブが盛んになり、スロープも設置され、情報は伝わるものとなった。そして、ゆっくりと、しかし着実に、障害のあるユースは無口で他人に依存している、という通念が崩れ始めた。

このアプローチは、プラン・インターナショナルのジェンダー・トランスフォーマティブ目標と単に合致するだけでなく、それを体現するものだった。それは主体性を強化し、社会的期待を変え、支援機関と支援対象のユースとの関与性を変えた。

パートナーシップの力

パートナーシップと協力なしでは、それらすべては一切実現可能ではなかっただろう。当初からプラン・インターナショナル・ウガンダはコミュニティに深く根差した人びととの深く有意義なパートナーシップを通じた緊密な連携によ

てのみ、真の包摂が実現できることを認識していた。

ここで、当該地域全体の障害者コミュニティと強いつながりを持つOPDである、LIDUPEDとのパートナーシップが登場した。彼らのリーダーシップは単なる形式的なものではなく、戦略的なものであった。彼らは共同で研修を主導し、教材を作成し、同プロジェクトが地方に住む障害のあるユースの実情に即したものとなるよう努めた。LIDUPEDのおかげで、同プロジェクトは信頼性と影響力を獲得し、それまで懐疑的な見方が支配していた場所で信頼を築き上げた。

続いて、学校と医療施設が参加し始めた。当初、多くの関係者が慎重な姿勢をとっていた。教師は不適切な発言を危惧と心配していた。医療従事者は障害のある人びとに包摂的なSRHRが意味するものさえよく理解していなかった。だが、障害者包摂ファシリテーターが偏見を持たずに質問を受け入れたことで、率直な対話と実践的な支援により、壁は崩れ始め、人びとの考え方も変化した。ある保健センターは、車椅子を使用する女の子のグループからの意見を反映し、思春期の若者たち専用の相談日を設けるという、数カ月前までは考えられなかった取り組みさえ行われた。

3. 監査対象となった医療施設には以下が含まれる:
アレプトングに位置するAmugu保健センターとAmugu小学校、リラに位置するBarr保健センターIIIとOlolo小学校、リラ市に位置するOngicha保健センターIIとAyago小学校、クワニアに位置するAbongomola保健センターIIとAgolowelo小学校、アパッチに位置するAyago保健センターIIとOllepek小学校、コレに位置するBala保健センターIIIとBala小学校。

A
GROWING
MOVEMENT

このパートナーシップモデルは、決して完璧とは言えるものではなかった。職員の離職が研修サイクルを乱し、リソースの制限が進捗を遅らせた。だが、早い段階で信頼が築かれ、障害のあるユースがあらゆる意思決定に関与したおかげで、プロジェクトの柔軟な対応・軌道修正・活動継続が可能となった。

変化の物語

Atimの物語は、彼女を過小評価していた世界への静かな反抗の物語である。それまで彼女は引っ込みがちで、彼女の言語障害を欠陥と考える人びとの小声の中で彼女の声は掻き消され、嘲笑や横目で見られるのを避けるようになった。しかしその後、彼女はピアノビゲーターグループに参加した。そこでは彼女が初めて単に話を聞いてもらうだけでなく、真摯に耳を傾けてもらえる場所だった。時間・励まし・彼女の仲間からの揺るぎない支えを得て、彼女は一步前に踏み出した。単に参加するだけでなく、先頭に立つために。

かつて言葉が見つからなかったModel School Healthプログラムのセッションで、Atimは新たな表現方法を見出した。彼女は紙に考えを描写し、身振り手振りを交えて複雑なテーマを説明した。次第にAtim自身だけでなく、周囲にも変化が訪れ始めた。生徒は前のめりになって熱心に学び、教師は目の前に広がる不屈の精神に謙虚になり、見守った。「予想していなかった変化です」と、彼女の担任教師は後に語った。

一方、グルーで開催されたコミュニティ集会では、視覚障害のある娘が人混みの中を自信に満ちた様子で歩み、立ち止まって人びとに挨拶し、仲間と会話を交わす姿を、父親は黙って座り、見守っていた。彼はかつて、教育は目が見える者のためだと確信し、娘の就学を拒んでいた。だが今、彼の娘は、彼が決して彼女のものにはならないと決めつけていた世界で、他の人に教え、議論を導き、堂々と立っていた。彼はゆっくりと立ち上がり、咳払いをし、「彼女に未来はないと思っていましたが、今、彼女が他の人を教えているのを見て、私は間違っていました」と認めた。彼の言葉には後悔がにじんでいたが、同時に、そこには別の感情も宿っていた。——希望である。

ある小さな逼迫状態の診療所で、別の変化が起きていた。その診療所ではアクセス性監査により、長年見過ごされてきた極めて明白な事項が判明した。診察台が高過ぎて、移動に困難を伴う患者の利用が不可能だったのだ。長年、彼らは困難を覚え、屈辱に耐えさせられたり、門前払いされていた。だが今回は、診療所のスタッフはそれを軽視せずに、行動を起こした。彼らは空間のレイアウトを変更し、移動式の診察台を導入した。それは、変化自体より遥かに大きなメッセージを伝えるものであった：「あなたは大切な存在です。あなたの居場所はここにあります」。

それは短時間でできる小さな行動にすぎなかった。しかし、その一つひとつが排除の壁にひびを入れ、やがてその裂け目から、驚くべきもの——可能性——が生まれつつあった。

課題と困難

すべてが順調に進んだ訳ではない。移動手段は依然として障壁である。村が遠隔地に位置したり、保護者が1人での移動に懸念を示したために、セッションに参加できなかったユースもいた。

抵抗、特に性と障害を組み合わせた議論に対する抵抗は残っている。宗教指導者がプロジェクトを公に非難し、セッションの場所変更を余儀なくされたコミュニティもあった。その際、ファシリテーターはLIDUPEDと信頼できる年長者に仲介を務めてもらい、関係を再構築した。

影響の追跡は容易ではなかった。障害に関するデータは断片的で、継続的な記録がないため、各集団のサービス利用状況の変化の測定は困難であった。

革新

この物語における変革とは、単にやり方を変えることではなく、正しい方法を見つけることだった。それは、力を現地に委ね、長年その権利を奪われてきた人びとが利用可能にすることだった。画一的な研修には頼らず、チームはユースの現実を直に伝える動的なビジュアル・フリップブック・大胆なコミュニティ演劇の寸劇・触覚を活かした学習ツールを作成した。

彼らは音楽や物語、そして日常の言葉を取り入れ、知識とは上から下への流れではなく、共有される体験であることを認識していた。彼らはユースに機能不全の制度への適応を強いるのではなく、制度を破壊し、ユースのために機能するものに変えたのだ。

同プロジェクトがリーダーシップを再定義したことは、最も強力な点だったかもしれない。障害のあるユースを教室・診療所・マイクの前に立たせることで、彼らの声やビジョンが次の次であるという考えを打ち砕いた。メッセージは明確だった。彼らは明日のリーダーではなく、今現在のリーダーであり、彼らの力を否定できる者はいない。

包摂を超えて: 力の移動

同プロジェクトは単に情報提供に留まらず、情報の伝達方法自体を再定義し、情報を誰もが入手可能で変革的なものにし、長年情報を得られなかった人びとが情報を自身で所有できるようにした。また施設の監査だけでなく、それらの空間が「耳を傾ける」在り方を一新し、あらゆる声、特に障害のあるユースの声が尊重される環境を創出した。

それは単にファシリテーター育成だけでなく、コミュニティが「可能である」と信じられる物事の枠組みに変化を生んだ。

本物語は、障害のある人びとの包摂が単なるリスト上のチェック項目ではないことを強く認識させる。それは、力の再分配・共感の醸成・不快感の解消に対する、勇敢で揺るぎない決意である。それは、他の人が限界の側面しか見出せなかった場に、リーダーシップを見出すことである。

未だ築くべきものも、学ぶべきことも、打破すべき障壁も多く存在する。しかしAtimのようなユースのリーダーの並外れた勇氣と、LIDUPEDのようなOPDの揺るぎないビジョンのおかげで、変革の基盤は盤石なものとなっている。

ある障害のあるピアナビゲーターは、こう力強く宣言した:「私たちはもはや権利について語るだけではなく、それらを実践しています。後戻りはしません」。



ZIMBABWE

TRANSFORMING
HOMES



要約

この物語は、ジンバブエを舞台に繰り広げられる変革の旅路を描いており、MBMF2プロジェクトが先頭に立ち、障害のあるユースに対し、障害のある人びとを包摂したSRHR支援を提供してきた。革新的な家庭訪問と支援戦略により、300名超の障害のある思春期の若者と彼らの家族に直接接触し、個別のニーズに合わせたSRHR教育・リソース・紹介支援を彼らの自宅で提供した。プロジェクトは、情報提供に留まらず、長年スティグマ・恐怖・誤解に苦しんできたコミュニティに変化を生む、影響力の発揮を図った。

コミュニティベースの取り組みと尊厳を重んじる姿勢の融合により、同プロジェクトは排除の壁を取り除きを目指した。その実現に向け、医療従事者の能力強化と彼らへの共感を持った傾聴・奉仕の実践のためのツールの提供と同時に、NCDPZが構築した強力なエンパワメントの枠組み5A'sを、あらゆる対話の中心に据えた。同プロジェクトがもたらす変革の力は、自身の人生が受けた支援により変化したという、RudoやRudoなどの個人的な体験談に鮮明に示されている。それらの事例は孤立したものではなく、永続的な変化を生み出している遥かに大きな潮流の一部なのだ。

本物語は行動喚起であり、実現可能になり得るものを示す設計である。また、能力に依らずあらゆる思春期の若者が、当然享受できるべき権利・ケア・敬意を受けられるようにするもので、他のコミュニティでも展開可能な再現性と拡大可能なアプローチを提供している。これは単なる医療制度変革ではなく、人びとの生活・コミュニティ・未来そのものの変革である。

ありのままのユースと向き合う

ジンバブエで障害のあるユースは、自身の権利・健康・将来に関する議論のなかで置き去りされることは多い。学校から排除され、サービスから見過ごされ、スティグマのために声を封じられてきた彼らは、自身の身体や権利に関する最も基本的な情報さえも長い間、得ることができなかった。MBMF2プロジェクトはその状況を変えるために始動した。この物語は、在宅支援モデルが、戦略的な提唱活動や能力強化と組み合わせることで、どうコミュニティの意識を変えつつあり、障害のある思春期の若者とユースのSRHRへのアクセスを強化しつつあるかを探っている。

これは、単にその人の現状を受け入れるだけでなく、その人自身を尊重する物語である。またそれは、揺るぎない敬意をもって家庭を訪れ、保護者を正義のための闘いでの味方と認識し、今まで彼らを閉じ込めていた壁を打破することである。そして、排除を強力なエンパワメントへと変え、ユースに自身の身体・権利・未来の主導権を取り戻させるようにすることである。



なぜ多くの人びとが依然として置き去りにされているのか

ジンバブエは2013年にCRPDを批准したが、障害のあるユースの多くは依然、基本的なSRHRの情報へのアクセス性が低い。構造的・法的・社会的障壁は今も存在し、学齢期の障害のある子どもの大多数は不就学であり、その結果CSEから排除され、公式な教育制度の中で共有されるSRHR教材を得られない状況にいる。文化的迷信によって、障害は無性愛と同一視されたり、障害のあるユースは自身の健康に対し、情報に基づいた判断ができないと決めつけられたりしている。そうした考えは彼らを孤立させるだけでなく、望まない妊娠・STI・コミュニティ内でのジェンダーに基づく暴力(GBV)等の、重大な危険に晒させることになる。

家族内で、障害のあるユースは過度に保護される、または放置される場合が多く、彼らの身体はあまりに繊細で、オープンな議論で扱うことはできないとされている。サービスが存在する場合も、彼らに対して包摂的/利用可能であることは稀である。医療従事者はケア提供への準備不足や不安だと感じている場合があり、コミュニティリーダーや保護者の考え方が、沈黙と恥の感情を助長していることが多い。そうした偏見や回避の風潮から、ユースは本来享受できるべき支援や理解を得られず、孤立と存在の不可視化という悪循環に陥っている。

在宅型エンパワーメントモデル

それらの障壁に対応するため、プラン・インターナショナル・ジンバブエは、SRC・NCDPZ・Intwasaなどのパートナー団体と共に、2022年後半に家庭訪問と支援戦略を開始した。その取り組みは単純であった。障害のあるユースがSRHRサービスを利用できないなら、プロジェクトがサービスを彼らの元で提供するというものだ。

重要な第一歩は、政府の社会開発省と連携して実施された、障害のある人びとの状況把握だった。その過程から、対象コミュニティ内の障害のある思春期の若者の特定と、彼らの障害の種類や分布状況が把握でき、効果的な介入策の実施を可能にした。そのマッピングは、5Aのモデルの適用における起点にもなり、サービスが

単に提供されるだけでなく、アクセス性と関連性を考慮して設計されるようにした。並行して、手話訓練を含む、医療従事者の能力強化にも取り組んだ。

家庭訪問は単なる説明会以上の、関係構築を意味するものだった。第1段階で、ファシリテーターは導入としての訪問を行い、同プロジェクトの説明をし、家族の声を傾聴し、SRHRに関する知識の不足部分を特定した。第2段階として、思春期・避妊・GBV・性の健康に関する対象を絞ったセッションが、月経衛生キットやSTI検査等の実践的な支援を伴って実施された。第3段階では、コミュニティのケアワーカーやピアファシリテーターとの継続的なメンター制度が実施された。

当初から、同取り組みは既成概念に疑問を投げかけていた。ファシリテーターは教えるだけでなく、いかにしてさまざまな障害のある人がSRHRの概念を理解できるようにするか・家庭内の力関係にどう対応するか・教育/経済的エンパワーメント/心理社会的支援等の広範なサービスへ参加者をどう紹介するか、を習得した。彼らは柔軟で包括的な解決策をもって、真のニーズに応えた。同取り組みでの特筆すべき追加要素は、NCDPZによる5A(受容・主体性・認識・アクセス・エンパワーメントモデル)の導入であり、障害のあるユースを単なるサービスの受け手ではなく、声を広める価値のある権利保有者として巻き込むための強力な枠組みを提供した。

5Aのエンパワーメントモデルは、包括的アプローチと包摂とエンパワーメントの重点化を組み合わせることで、障害のあるユースの可能性を引き出すものである。この取り組みは、情報不足・低い自尊心・自信の欠如といった主要な障壁を取り除き、ユースがレジリエンスや自己主張力を養い、強力な変化の担い手となる勇気を育むことを支援するものである。

しかし、そこだけに留まらない。同モデルは家族・介護者・コミュニティを巻き込むことで影響力を広げ、ユースを包み込み、力を与える支援ネットワークの構築に至った。彼らが力を合わせれば、強さと決意を持って、人生の困難に立ち向かうことができる。5Aモデルは、誰も取り残さないことを中核に据えている。この取り組みは、政策立案者に対し、障害のあるユースがリーダーとして認められ、自らの未来を切り拓き社会変革を牽引するような世界を築くよう促している。この波及効果は、将来の世代がビジョンと自信、そして希望を持ってより包摂的な社会へとリードするよう促すところにある。

変革の物語

脳性麻痺を抱える14歳の女の子Rudoは、ジンバブエの都市ブラワヨで、賑やかな日常が手の届かないところにあるかのように感じられる家の静かな片隅に閉じこもって生活していた。ほこりをかぶった窓から日光は差し込むが、自宅の4つの壁に囲まれたRudoの世界は狭いまま、彼女の父親だけが唯一の相棒だった。失業中で生活に苦しみながらも父親は、彼女の介護者・守り手であった。彼女のために設計されていないこの世界で、彼女の入浴や月経管理の介助など、彼女の安全を確保することまで、生活のあらゆる細部にわたって世話をしていた。彼の献身に疑いの余地はないが、責務は大変重く、彼が外出しなければいけない時は、Rudoは沈黙の中に独りで置き去りになっていた。その孤立は耐え難く、彼女はつながりや、自身が障害ではなく可能性により認識される、ありのままの自分でいられる場所を渴望した。彼女に必要なのはただ生き延びることだけではなかった：彼女は人生を体験し、自分の体や権利について学び、家の壁の外にある世界を理解する必要があった。

そして、彼女の人生を一変させる瞬間が訪れた。同プロジェクトの家庭訪問活動を通じて、それまでその存在すら知らなかったコミュニティに出会い、障害のある女の子のグループとつながった。

そこで初めて、Rudoはそこに居場所があると感じた。彼女を囲んでいたのは、彼女を理解し、障害ではなく、1人の人間としてみてくれる女の子たちだった。新たな支えとなった女性ボランティアたちは、ケアだけでなく、自信を彼女に与えた。長年、娘の世話の重い責務を1人で負っていた彼女の父親は、安堵の波が打ち寄せてくるのを感じた。彼はもう1人ではなかった。そして孤立した状態にあったRudoも、自身の居場所を手に入れ、学び、成長し、自分が当然に持つべき権利を見出すことができた。

ブラワヨの別の地域で、視覚障害のある12歳の女の子Anodiwaもまた、遠く離され、人の温かみを感じられない世界で生きていた。Nguboyenjaで祖母と暮らす彼女は、長期間不就学で、思春期を一人で乗り越えざるをえないことが多かった。監督も指導も受けずに、彼女は自分がどこに属しているのかわからないまま、迷路のなかを歩くように、人生をさまよっていた。



そんなとき、そのプロジェクトが彼女の元を訪れ、祖母の家を希望の約束を携えて訪ねた。ファシリテーターは単に解決策の提示だけでなく、彼女たちの声に耳を傾けた。彼らは、Anodiwaの孤独ともっと何かを渴望する気持ち、そして彼女の唯一の介護者である祖母が背負っていた重荷を理解した。それは画一的な解決策ではなく、彼女の生活に適応するように調整されたものだった。彼らは慎重な評価に基づき、彼女を彼女が必要とする支援を提供できる特別支援教育施設である、Makheteni学校へ紹介した。現在、Anodiwaは健やかに成長している。学費は社会開発省が負担し、彼女は初めて真に彼女のニーズを理解する仲間や教師に囲まれている。かつてその責任に押しつぶされそうだった祖母は、孫娘に未来があると知り、新たな希望を抱いて安息を得ている。

それら2つの物語は、同プロジェクトが生み出した驚くべき変化の一部に過ぎない。この取り組みによって人生に変化がもたらされた障害のある若者は300名超にのぼる。



成功の要素とは

同取り組みの成功は、その関係性を重視する基盤にある。家庭訪問は、サービス提供者と家族との間にあった距離を縮め、恥やためらいを対話へと変え、保護者を「障壁」ではなく「パートナー」として位置づけるものとなった。

医療従事者研修も重要な柱の一つとなった。継続的なメンター制度により、研修を受けた医療従事者の53%が、障害のある思春期の若者へのサービス提供に対し、以前より自信が高まった、と報告した。それは個人だけでなく、組織内の文化的変化を反映している。医療従事者は手話の研修を受け、聴覚障害のあるユースとのコミュニケーションの壁を埋める一助となっている。

パートナーシップも重要であった。OPDとの連携により、実体験が活動の指針となることが保証された。地方自治体の諸部門は、紹介支援と政策面での後押しを行った。その多くが障害を持つピアファシリテーターは、共感・信頼できる発信者となった。同プロジェクトはまた、障害のあるユースが議員・省庁職員・現地保健局長とのユース主導の対話を行うための提唱の場を創出し、それにより彼らの声が広く伝えられ、自信と主体性の強化に寄与した。

最後に同プロジェクトでは、SRHRは孤立して存在するものではない、という点が認識された。家族が職業訓練の紹介や助成金申請に対する支援を求めた場合、プロジェクト側はそれらに応えた。これにより信頼が構築され、一層重要なこととして、権利の相互関連性の尊重に至った。

省察と学び

すべての成果が順調に現れた訳ではない。調査対象のコミュニティ住民の内、障害のある思春期の若者たちがSRHRサービスに平等にアクセスできるべき、と考える者は僅か30%に過ぎず、根強いスティグマが今も存在することを認識させられた。だが、同プロジェクトは有望な変化の兆しも明らかにした。保護者はそれまで障害のある自身の子どもを将来の保護者や性的存在として考えたことがなかったことを認めつつも、今後は深く学ぶ姿勢を示した。世代間対話が、沈黙を正直な会話へと置き換え始めたのである。

視覚・聴覚障害のある人に対応したSRHR動画などのデジタルツール活用は、より多くの人に提供するための有望な実践策として浮上した。プロジェクトでは継続性の重要性も明らかになり、継続的な働きかけがなく、今までの慣習に戻ってしまった家族もおり、持続的関与と多層的介入策の必要性が示された。サービスが家庭のすぐそばまで届けば、心にも変化が訪れることをこの取り組みが証明したことが、最も重要な点であろう。今までタブー視されていたことが可能となり、周縁にあったものが中心となったのだ。

展望

MBMF2が継続するなか、家庭を基盤としたSRHR支援のモデルはジンバブエだけでなく他の国でも、障害のある人びとの包摂の実現に向けた説得力ある道筋を示している。それは、人びとの置かれた現状を受け入れ、信頼を構築し、成長できる存在としてあらゆる思春期の若者に対応することの重要性を裏付けるものである。

次の段階として求められるのは、家庭訪問を基盤としたモデルの拡大、5Aの枠組みの国家プログラムへの統合、そして省庁をはじめとする政府機関とOPDとの連携強化を通じた、持続可能な形での取り組みの展開である。訪問の度・会話する度・考え方が変わる度に、新しい未来が形作られつつある。それは、権利が与えられるのではなく、認められる未来である。あらゆるユースはただ生き延びるのではなく、自身で決断する権利を享受できる存在なのだからだ。





プラン・インターナショナル・フィンランドについて

プラン・インターナショナル・フィンランドは、国際的なプラン・インターナショナルの一員であると同時に、独自の理事会を有する独立したフィンランドの非政府組織です。プラン・インターナショナル・フィンランドは、子ども・ユース・支援者・パートナーと連携し、公正な世界の創出と女の子や脆弱な立場にいる子どもたちが直面する課題の根本原因に取り組む、開発および人道支援を行う団体です。私たちは、子どもの出生から成人に至るまでの子どもの権利を擁護し、子どもが危機や逆境を乗り越える力を身につけられるよう支援しています。広範な活動範囲・経験・専門知識を活かし、地域・国家・世界レベルでの政策や実践での有意義な変化に働きかけます。

プラン・インターナショナルは1937年に設立され、フィンランドでは1998年から活動しています。私たちは宗教的・政治的とは一切関連性を有さない、独立組織です。数万人のフィンランド人が、特にジェンダー平等に重点を置きながら、貧困の根絶と子どもの権利擁護という私たちの使命を支持しています。

私たちは、ジェンダー平等は持続的変化の基盤であると考えています。私たちは、女の子の価値を認め、彼女たちの力を引き出し、彼女たちの権利を守り、不公正をなくす世界を目指しています。人道支援・開発・平和の連携というアプローチを通じて、女の子の権利に対する差し迫った脅威と、脆弱な危機下で根強く残る構造的なジェンダー不平等に取り組んでいます。低所得国における開発や人道支援活動、およびスポンサーシッププログラムに加え、フィンランド国内で積極的な提唱活動・企業とのパートナーシップ・啓発活動を行っています。私たちは子どもの声に耳を傾けるだけでなく、意思決定への関与参加を促し、彼らが自らの未来を形成する過程で発言権を持てるよう努めています。

プラン・インターナショナル・フィンランドは、個人支援者・企業パートナー・フィンランド外務省・EU・国連から資金提供を受けています。当団体を通じて、皆さまからのご支援は迅速かつ効果的に届けられ、大きな変化をもたらす一助となります。

Plan International Suomi

Teollisuuskatu 13

00510 Helsinki, Finland

Tel: +358 9 6869 800

Customer service: +358 9 6869 8030

E-mail: info@plan.fi
plan.fi

 Facebook: facebook.com/plansuomi

 Instagram: instagram.com/plansuomi

 LinkedIn: [Plan International Suomi](https://LinkedIn: Plan International Suomi)

 Youtube: youtube.com/user/PlanSuomi

ISBN 978-952-7151-11-2